

日本とスペインをつなぐ無料スペイン情報誌 [アクエドクト]

acueducto

La revista española en Japón

巻頭特集

ガリシア

2010年「聖ヤコブの年」のガリシアから
マジカル・ワールド・ガリシア

ガリシアの原風景ーロブレの森へ

Reyes y monjes en la peregrinación
medieval a Santiago de Compostela

ガリシア、「ケルト」の残影

¥0

GRATIS/第3号

30- noviembre - 2010

www.acueducto.jp



スペイン政府観光局
www.spain.info



Cámara
Madrid



Centro Cultural Español
スペイン文化センター





Enforex

スペイン語ワールドで
スペイン語を学ぼう

エンフォレックスで
スペイン語ワールドを
体験しよう！



厳選された
24校

スペイン語学校
スペイン&ラテンアメリカ

ヘッドオフィス

Alberto Aguilera, 26
28015 Madrid - España
Tel.: +34 91 594 37 76
Fax: +34 91 594 51 59
Email: info@enforex.es
www.enforex.com



Shoji Bando

ご挨拶

スペイン情報誌「acueducto」第3号をお届け致します。

今年はハコベオの年に当たります、いいかえればガリシアの年であり、スペインはもとより世界中からサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指して多くの人がガリシアに参集しています。大聖堂でのお祈りの後、帰路を急ぐ人々が世界平和の使者にならんことを祈るばかりです。

今年はガリシアの記念の年ということで、本誌でもガリシア特集を組みました。ガリシアはスペインの中では辺境の地といわれますが、日本とスペインの交流史を考えますと、その最古に立つのは決してナバラ地方出身のフランシスコ・ザビエルなどではなく、ガリシア出身のペロ・ディエスという人物なのです。日本とはそんなつながりのあるガリシアは、近年の巡礼ブームによって、日本でも少しずつ知られるようになってきました。学生の中にも、サラリーマンの中にも、また定年者の中にも、「カミーノ・デ・サンティアゴ」を歩こうとする人は年々増えているように思われます。ペロ・ディエスがいったいどんな人物であったのかそれを語る資料は何一つ遺されていませんが、ガリシアを訪れる人が1人でも多く、この地が今か

ら460年以上も昔に両国の交流史の第一歩を記した人物の故郷であることを思い出してくればこれに勝る喜びはありません。

本誌の刊行によって、スペインと日本の交流が新たな段階に入ろうとしています。スペインと日本でともに本誌を読み、それが新たな出会いと発見を可能にしているからです。最近、本誌3号の執筆者の一人であるフェルナンド・シッド・ルカスというエストレマドゥラ大学の先生が来日して、京都を訪れました。彼の出身地のエストレマドゥラの一角に桜の名所があるというのです。スペインの桜といいますと、支倉常長ら慶長遣欧使節の侍たちの末裔であるハボンさんの住むセビーリャのコリア・デル・リオに、常長の故郷である仙台の関係者が植樹した桜のことを思い出しますが、スペインにも日本とは無関係に桜の名所があったとは露にも知りませんでした。新しい発見の何ものでもありません。やがてスペインの観光ルートに新しく加わることになるでしょう。

坂東省次

Número 3 de la revista ACUEDUCTO

Este año es el Año Santo Jacobeo, lo cual supone el año de Galicia. Por lo tanto, visita Santiago de Compostela mucha gente tanto de España como de otros países del mundo. Esperamos que los peregrinos, tras rezar en la catedral de esa ciudad, sean mensajeros de la paz mundial.

Para celebrar el año conmemorativo de Galicia, la presente revista también ofrece una sección especial de esa Comunidad Autónoma. Aunque dicen que Galicia es una región marginal en España, en cuanto a las relaciones hispano-japonesas, Galicia fue “pionera”, ya que el español que visitó Japón por primera vez fue Pero Díez, procedente de Galicia, no San Francisco Javier, de Navarra, como se suele decir. Galicia se conoce cada vez más en Japón por la moda de la peregrinación durante los últimos años. Nos da la sensación de que entre los estudiantes, empleados, y jubilados, está yendo en aumento el número de quienes quieren realizar el Camino de Santiago. A pesar de que no existe ningún documento que explique el personaje de Pero

Díez, nos alegraríamos si la gente, al visitar Galicia, recordara el hecho de que este lugar fue la tierra natal de una figura que contribuyó a dar el primer paso en las relaciones hispano-japonesas.

A través de la publicación de esta revista, el intercambio entre España y Japón está entrando en una nueva fase. Esta revista se lee no sólo en Japón, sino también en España, lo que nos permite un nuevo encuentro y descubrimiento. Recientemente, el Prof. Fernando Cid Lucas, de la Universidad de Extremadura y uno de los colaboradores de este número, ha visitado Kioto. Según él, en Extremadura, su región natal, hay un lugar famoso por sus cerezos en flor. Rememorando los cerezos en España, son conocidos los que están en Coria del Río, de Sevilla, donde viven los descendientes de la misión nipona de la era Keicho (1615), capitaneada por Tsunenaga Hasekura. Estos cerezos han sido plantados por los representantes de Sendai donde nació Hasekura. Por eso, nos sorprendemos de que exista un sitio popular por los cerezos en una región que no tiene ninguna relación profunda con Japón. Es nada más y nada menos que un nuevo descubrimiento. Estamos seguros de que en un futuro cercano este lugar va a formar parte de una nueva ruta del turismo en España.

Shoji Bando

Índice

Carta del Director	2
Índice	3
Especial Galicia	4
- 2010, año Jacobeo	
- El mundo mágico de Galicia	
- El paisaje gallego de antaño en torno a los robledos	
- Reyes y monjes en la peregrinación medieval a Santiago de Compostela	
- Galicia, tras el rastro de los celtas	
Gastronomía	12
- Cerveza de Galicia	
- El Congreso lomejordelagastronomia.com cierra su edición más innovadora, popular e interactiva	
Cine	15
- Pájaros de Papel	
Música	20
- Melodía para siempre	
Arte	23
- El Greco: un griego en España	
Literatura Infantil	24
- Libros infantiles en el mundo hispánico (1)	
Varios	26
- Club de Flamenco de la Universidad de Kansai	
Gaidai, Anda Jaleo	
- Informe desde Barcelona. Huelga general tras 8 años	
Español	28
- Lección de español para principiantes (3)	
- verbos regulares	
- Lección de español (3)	
- verbos del tipo GUSTAR	
Libros	31
- Crítica literaria. Paseando por el mundo de Don Quijote	
Flamenco	32
- Presente y pasado del flamenco	
- Extremadura: Tierra de lo jondo	
- Alegrías de Cádiz	
España y Yo	37
- Un encuentro con los dulces españoles	
Viajes	38
- Guadalajara, de día y de noche	
Historia	40
- Serie: Tres episodios sobre Guernika	
+ Episodio 2: Tratamiento de la información tras el bombardeo de Guernika	
Ensayo	42
- La noche de Madrid (3)	
Fútbol	43
- El día más importante del año para un catalán	

ご挨拶

acueducto 目次

特集-ガリシア

2010年「聖ヤコブの年」のガリシアから
マジカル・ワールド・ガリシア
ガリシアの原風景ーロブレの森へ
サンティアゴ・デ・コンポステーラへの中世の巡礼
における王と僧侶

ガリシア、「ケルト」の残影

グルメ

ガリシアのビール
lomejordelagastronomia.com大会

映画

Paper Birds

音楽

名旋律は永遠に

芸術

スペインのギリシャ人

児童文学

スペイン語圏 子供の本めぐり(1)

その他

日本で活動するスペイン関連クラブのご紹介
第3回 関西外国語大学フラメンコ部 Anda Jaleo
8年ぶりのゼネスト バルセロナ現地レポート

スペイン語

はじめてのスペイン語講座
第3回 規則動詞について
スペイン語講座
(III) gustar型動詞について

本

書評 『ドン・キホーテの世界をゆく』

フラメンコ

フラメンコの今と昔
エクストレマドゥーラ
アレグリアス・デ・カディス

スペインと私

スペイン菓子との出会い

旅

グアダラハラ、夜も昼も

歴史

シリーズ ゲルニカをめぐる3つのエピソード
その2 ゲルニカ爆撃の報道

エッセー

マドリードの夜(3)

サッカー

カタルーニャ人にとって一年で最も重要な日

スペイン情報誌 acueducto

Director:

Shoji Bando 坂東省次

Colaboradores:

Yo Kawanari 川成洋
Kuniyoshi Nakai 仲井邦佳
Daniel Arrieta ダニエル・アリエタ
Abel Álvarez アベル・アルバレス

Coordinación:

Ayako Wakita 脇田絢子
Kaname Ikemoto 池本かなめ

Editor:

Alejandro Contreras
アレハンドロ・コントレラス

ADELANTE Co., Ltd
2FL. Chiyoda Bldg.
West Annex
2-5-8 Umeda Kita-ku
Osaka 530-0001

有限会社アデランテ
〒530-0011
大阪市梅田北区2-5-8
千代田ビル西別館2F

Tel/Fax 06-6346-5554
email: info@acueducto.jp

本誌の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
本誌の内容および広告に関しては、発行元の責任の限りではありません。



スペイン語学習テキスト
2011年発刊予定
お問合せはアデランテまで

Colaboradores:



スペイン政府観光局
www.spain.info



Cámara
Madrid



Centro Cultural Español
スペイン文化センター





「聖ヤコブの年」にだけ開かれる「聖なる門」をくぐるために朝早くから行列を作る人々

2010年のスペイン、ガリシア州の州都であるサンティアゴ・デ・コンポステーラ。いつもは中世の趣を残してひっそりとたたずむこの小さい花崗岩の町も、「聖ヤコブの年」である今年は、世界中から観光客や巡礼者が続々と訪れ、夏のバカンスシーズン中は、まるで東京や大阪の繁華街のような賑わいでした。

サンティアゴとはスペイン語で「聖ヤコブ」を意味します。この聖人を祀る日が7月25日で、この日が日曜日に重なる年が「聖ヤコブの年」となります。この特別な年は、6年、5年、6年、11年という周期で回ってきますが、2010年の後は11年後の2021年なので、「どうしても今年、サンティアゴに行きたい」という旅行者の数が通常の数倍まで膨れ上がっています。そして、この「聖ヤコブの年」にしか開かれない「聖なる門」をくぐると「恩赦」が得られるので、巡礼者も観光客も、朝早くから行列を作って辛抱強く並んでいます。

多くの巡礼者たちは、「サンティアゴ巡礼」のいくつかのルートの中で、最も主要な「フランスルート」を通してサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指します。セブレイロ峠が、ガリシア州内のこのルートの出発点です。ここには、「サンタ・マリア・レアル教会」という9世紀に建設が始まった由緒ある教会があり、キリストの「聖杯伝説」とも関係があると言われています。また、このルート沿いにベネディクト派の「サモス修道院」がありますが、7世紀にその起源を持つこの荘厳な修道院の院長を始め修道士たちは、非常な親日家です。まだまだ数の少ない日本人巡礼者や観光客を、心から歓迎してくれます。

ガリシアの歴史をさらに遡ると、聖ヤコブによってキリスト教が布教される以前の紀元前2世紀頃から、ガリシアにはローマ人の侵攻が始まり、それまで住んでいたケルト系民族を北方に追いや

2010年「聖ヤコブの年」のガリシアから



サンティアゴ巡礼路の中でも最も有名なフランス・ルートの一風景



1 フランスルート沿いにある、サモス修道院教会内部 2 サモス修道院パティオ 3 サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂前に現れたローマ人軍団 4 セブレイロ岬のサンタ・マリア・レアル教会 5 サンティアゴ・デ・コンポステーラ 旧市街パノラマ 6 フランスルートの途中の風景 7 「聖なる門」の前の行列



り、植民地を築きました。ローマ帝国の威光はこの辺りでも紀元5世紀頃まで続きました。その結果、ガリシアには、ローマ時代の遺跡が数多く残っています。「ルーゴ市の城壁」はユネスコ世界遺産に登録されている貴重な建築物です。ルーゴ市の市民は、毎年夏に「ローマ祭」を開催します。お祭りの間、城壁の周りではあたかも2千年前のような光景が繰り広げられます。ある週末、観光客で賑わうサンティアゴ大聖堂の前に、ルーゴからやって来たローマ人兵士たちが現れました。千年の歴史を持つ大聖堂の前に、突然、二千年前のローマ人軍団。この日、サンティアゴを訪れていた人々にはちょっとした余興でした。

11月6日には、ローマ教皇がサンティアゴ大聖堂を訪れますが、実質20%以上の失業率を抱えるガリシアで、この教皇訪問の警備にかかる莫大な費用をどこから捻出するのか、ガリシア州政府、サンティアゴ市が頭を悩ましています。サンティアゴ大聖堂から、「お布施」を募る手紙が配られ、すでに不景気に苦しむ一般市民に、さらにその負担が掛けられようとしています。教皇が聖ヤコブ様にお願いすることは一体、どんなことなのでしょうか。巷には、日に日に物乞いをする人たちが増えています。

(現地レポート サンティアゴ・デ・コンポステーラ在住 塩澤 恵／文・写真)



塩澤 恵

しおざわめぐみ Megumi Shiozawa

生年月日:1965年5月28日 本籍:東京

学歴

1988年青山学院大学 国際政治経済学部卒業

職歴

大学卒業後、東京の中堅翻訳会社へ就職。1990年から1年、サンティアゴ・デ・コンポステーラへ語学留学。その後、93年度のスペイン政府奨学金を得て、再びサンティアゴ・デ・コンポステーラへ。以来、ガリシア州政府の日本における文化・観光プロモーションのコーディネートを行なう。現在は、ガリシア州の対日業務を総合的に行う現地法人コンサルティング会社Office Shigotoyaの代表。

スペインタイルの総付け教室
& 手作りタイル販売

スペインタイルアート工房
Tokyo/Osaka/Valencia (Spain)

大阪市西区南堀江 1-20-23-1003
Tel & Fax 06-4390-6545
Email: spaintile@japan.email.ne.jp
<http://homepage1.nifty.com/spaintile/>

マジカル・ワールド・ガリシア！

海に生きるガリシア人は、常に自然の脅威と隣り合わせで暮らしてきた。そのためか、キリスト教以前のアニミズムがいたるところに残っている。

聖地、サント・アンドレ・デ・テイシードでは「生涯に一度は巡礼しなさい、もし叶わなければ、死んでから虫に姿を変えて行きなさい」と言われている。だから、年に一度の巡礼日に虫を殺してはならない。また、お墓から死者を連れてくる人もいて、「隣に誰もいないのに話しかけている人を見かけても変に思わないように」とも言う。

カラフルなミーガは、嵐にあわないように、生涯食べものに困らないように、と何にでも効くお守りである。



ガリシア人は石好きだ。先史時代のドルメンがそこ
ここにあり、石にまつわる伝承も多い。たとえば、聖ヤ
コブが乗って来たという石は、現在もパドロン教会の
祭壇下にある。ムシアでは聖母マリアが平たい大石に
乗って海のかなたからやって来たと言われる。大西洋の
荒波がうちつけるムシアの浜には、それこそ、超常現
象でもなければ集められないような大きな石がごろご
ろしている。聖母が乗って来た石のほかに、「腰痛が治
る石」、「恋人たちの秘め事を成就させる石」などがあ
り、まじないが違和感なく、キリスト教と同居している。

石が水に浮くというだけでも奇跡だが、聖人を運んで
来た、という伝承は何を示すのだろうか。ガリシアは海に
突き出ているので、妙ないでたちでわけのわからぬ言葉
をしゃべる人たちが、ある日突然海のかなたから現れる
というのは珍しくなかっただろう。しかも、カストロという
石の円形集落が示すように、高い文明をもつ未知の国か
らの訪問者である。ガリシア人にとっての「海」は「宇宙」
に等しかっただろう。宇宙人のもたらす新薬や技術は、ガ
リシアの人々の目には魔術のようにうつったのではない
だろうか。

変わって、現代、カトイラのバイキング祭りは、
上陸した海賊が破壊の限りを尽くす野生回帰ロ
マンである。形は変われども、海からやってくる「
不思議」にガリシア人の興味は尽きないようだ。

(文・写真 浅野ひとみ)



ムシア「腰痛が治る石」9回くぐらなくちゃ…



サンタ・テクラ「カストロ」紀元前1世紀頃



写真左
サント・アンドレ・デ・テイシード「ミーガ」

写真下 サント・アンドレ・デ・テイシード「遠景」



浅野ひとみ

あさのひとみ
Hitomi Asano

東京都出身。

名古屋大学卒業、同大学院、お茶の水女子大学
大学院修了、人文科学博士。サンティアゴ・デ・コン
ポステーラ大学留学。専門はキリスト教美術。

2000年より長崎純心大学准教授。

趣味は、トレッキング、ドライブ。

サンティアゴ巡礼路、四国八十八ヶ所歩き巡礼挑
戦中。

サンティアゴ巡礼路の終着点であるガリシア地方を歩いていると、よくユーカリの森に出会った。森に入ると爽やかな香りが漂い居心地が良い。それもそのはずで、ユーカリの葉から取れる精油には殺菌効果や鎮痛・鎮静作用があり、アロマセラピーなどにも使われているほどなのだ。しかし、残念ながらこうしたユーカリの森は、かつてこの道を歩いた巡礼者が見た風景ではない。

その昔、ガリシアは「ロブレ(樺)」や「カスターニャ(栗)」など広葉樹の森に覆われていた。この地の先住者であった古代ケルトの司祭ドルイドは、彼らが神聖視するヤドリギを育むロブレを崇拜し、森は精霊の宿場所と考えた。また、この地方ではジャガイモが入ってくるまで栗を主食とし、巡礼路に沿って点在する村々では、今なお栗が栽培されておりいたるところに栗の巨木が立っている。道で大きな栗の木に出会うたび、日本の縄文遺跡に残されていた栗の巨木を思い出した。私にとってブナの森は時を遡ることのできる原風景であり、巡礼の旅で出会いたかったもののひとつだった。しかし、現在ガリシア地方の巡礼路に残された広葉樹の森はほんのわずかでほとんどがユーカリに取って代わ

られてしまっている。ことの始まりは十六世紀のこと。『無敵艦隊』を建造したときにガリシアの森のほとんどが伐採され山は荒れ果てたという。その結果、足りなくなった木材や燃料を獲得するために選ばれたのが成長の早いユーカリだった。乾燥地帯でも根を深く伸ばし地下水を引くユーカリは、たしかに早く成長するがその引き換えに土地の栄養分も瞬く間に消費してしまう。やがて大地は痩せ、樹に含まれる油成分のため山火事が頻発するようになった。最近になって、ようやく昔のようなブナの森を取り戻す運動が広がりつつある。山と海が相互に繋がりを持ち、森が海にとって大切な存在であることが理解されるようになると、漁業関係者を中心に豊かな森を作るために広葉樹の植林が始まったのだ。

大西洋まで歩き続けた巡礼の旅を終え、帰るバスの中で一人のカメラマンに会った。ひと通り世間話をしたのち、ロブレの古い森を探しているのだから知らないかと尋ねると、ガリシアの南に昔の暮らしを続ける小さな村があって、そこはロブレの深い森の中にあるという。いまだ残されている古の森ーガリシアの原初の風景はまだ健在だった。それは、私にとってこの地を再び訪れる道を照らすひとつの光となった。

早朝の冷えた空気の中、森をゆく巡礼者たち





ガリシアの巡礼路で出会った巨木。その姿は美しい。

ガリシアの原風景ーロブレの森へ

(写真・文 赤坂友昭)



赤坂友昭 (あかさかともあき / Tomoaki Akasaka)

写真家。

アラスカやカナダの先住民族やモンゴルの遊牧民の取材を続ける一方、スペインの風土と人々に魅了され、ここ数年足繁く通う。昨年7月にはサンティアゴ巡礼路を歩き、雑誌『Coyote』に写真と文を発表。近著に写真集『The Myth -神話の風景へー』がある。また、大阪市福島区のアトリエにおいて写真ギャラリー「フォトギャラリー・サイ」を主宰。

赤坂友昭写真事務所
<http://www.akasakatomoaki.net>

フォトギャラリー・サイ
<http://photo-sai.com>

Reyes y monjes en la peregrinación medieval a Santiago de Compostela

12世紀に、サンティアゴ・デ・コンポステーラは、この時代のキリスト教社会における象徴としての重要性から、巡礼の終着点としての地位を確立した。

11、12世紀のキリスト教徒の王達は、サンティアゴ・デ・コンポステーラから聖別され、神の恩寵によって与えられた力を誇示する代わりに、橋の建設、都市の発展、寺院や教会への援助、修道院への寄付等、サンティアゴ・デ・コンポステーラや巡礼路のインフラ整備を進めた。これによって、修道士達は、グレゴリウス革命によって生まれた新しい考え方や主義を伝達することができた。

El Occidente cristiano medieval forjó su personalidad cultural y espiritual en las rutas de peregrinación a Santiago. En el siglo XII Compostela se consolidó como meta de una peregrinación multitudinaria que potenció su papel de lugar sagrado y nuevo centro de poder, no sólo por el significado político e institucional de su señorío, ni por su capacidad creciente en la recepción de ofrendas, rentas y privilegios, sino sobre todo por el alcance simbólico y espiritual que tenía para la sociedad cristiana de la época. La presencia de los monjes cluniacenses en las rutas jacobeanas se vincula con este período de esplendor cultural medieval, época que coincide con el impulso que otras instituciones ofrecen a la causa jacobea. Los soberanos cristianos de los siglos XI y XII (Sancho III el Mayor de Navarra (1000-1035), Alfonso VI (1065-1109), rey de Galicia,

León y Castilla, y Sancho Ramírez (1063-1094), rey de Aragón en 1063 y de Navarra a partir de 1076), fieles a su papel rector y a la significación simbólica de quienes, ungidos y consagrados, ostentan el máximo poder político por la Gracia de Dios, favorecieron el trazado del camino en zonas donde no existía, construyeron puentes sobre los ríos, favorecieron el desarrollo de las ciudades, financiaron templos y catedrales, otorgaron privilegios y ofrecieron donaciones a los monasterios de la ruta, potenciando así la infraestructura hospitalaria, y redimieron de impuestos a los peregrinos que pasaban por sus reinos. De tal suerte fue este impulso que los monjes cluniacenses participaron de un espacio privilegiado, capaz de transmitir y encauzar las nuevas ideas y principios nacidos de la Reforma gregoriana.

Francisco Singul



Francisco Singul

Doctor en Historia del Arte, jefe de área de exposiciones y publicaciones del Xacobeo (Xunta de Galicia), estudioso del Camino de Santiago y comisario de exposiciones. Ha escrito multitud de artículos sobre historia del arte gallego y la cultura jacobea en libros colectivos, revistas especializadas y actas de congresos. Es autor de varios libros sobre la ciudad de Santiago y los caminos de peregrinación, que han sido publicados en España, Italia, Brasil y Japón

フランシスコ・シングル

美術史博士。
ガリシア自治州政府「聖ヤコブ年」展示・出版部長。サンティアゴ巡礼路の研究を長年行っている。展示責任者。
ガリシアの美術史や聖ヤコブの文化について、多くの記事を執筆。また、サンティアゴ・デ・コンポステーラ市及び巡礼路について本を執筆。スペインをはじめとして、イタリア、ブラジル、日本で出版されている。



ガリシア、「ケルト」の残影

カストロ (Castro) という古代の遺跡がガリシアに点在している。ケルト系の部族が暮らしていた集落跡のことで、2000年以上前には石壁を積み上げて造った堅固な家屋が立ち並んでいた。いずれも防御機能をそなえており、集落の中で穀物や豆類の栽培、家畜の飼育などが行われていた。カストロはポルトガル北部と合わせて30数ヶ所が確認されている。渦巻きや螺旋を使った流麗な装飾模様(ケルト模様)が特徴のトルク(首環)や水差し、ブローチなどの手工芸品、馬具、武器、人頭像などが出土している。サンティアゴ巡礼のセブレイロ村にあるガリシアのひと昔前の農家パジョサ(パリオサ)はカストロの住居を起源にしているといわれている。

北東部ルーゴ県にある丘陵地ヴィアドンガ、北西部ラ・コルーニャ(ガリシア語ではア・コルーニャ)県のバルバンサ半島西海岸に面するバローニャ、南西部ポンテヴェドラ県のポルトガルとの国境にそびえる標高341メートルのサンタ・テクラ(ガリシア語ではサンタ・テグラ)山の中腹にあるカストロがよく知られている。とくに「ケルトの村」の異名をとるサンタ・テクラは160ほどの家屋がびっしりと密集しており、保存状況も良好とあって、観光スポットになっている。



紀元前4世紀ごろの
ケルト＝イベリア人の人頭像
(オレンセ考古学・美術陳列館)

古代のヨーロッパを席卷したケルト人がドナウ川上流域やガリア(現在のフランス)辺りからピレネー山脈を越え、イベリア半島へやって来たのは紀元前7世紀末ごろとみられている。ケルト人は単一民族ではなく、インド＝ヨーロッパ語に属するケルト語を共通にした部族の集合体である。先住の非インド＝ヨーロッパ語族のイベリア人と混血した彼らはケルト＝イベリア人と呼ばれ、半島のほぼ全域に定住したが、

紀元前2世紀以降、ローマの勢力に押され、最後の牙城となったガリシアも紀元前19年、ローマの軍門にくだった。ガリシアの名は、その地に住み着いていたケルト系の部族、ガラエキ族に由来する。

ローマ化の進行につれてケルト語はすたれ、紀元5世紀には消滅したという。それでも今日、ガリシアは古代ケルトの息吹を伝える地として、アイルランド、英国のスコットランド、ウェールズ、フランスのブルターニュなどと共に〈ケルト文化圏〉に属している。一見、ケルトらしさはほとんど感じられない。それでも古代ケルト人の末裔であることにガリシアの人たちは何かしら拠り所を求めているようだ。「ラテンの鎧を着たケルトの地」。しばしばガリシアはこう例えられる。

(文・写真 エッセイスト 武部好伸)



俯瞰撮影したヴィアドンガのカストロ。大きさは甲子園球場とほぼ同じ



「ケルトの村」と呼ばれているサンタ・テクラ山のカストロ



武部好伸

(タケベ・ヨシノブ / Yoshinobu Takebe)

1954年、大阪生まれ。大阪大学文学部美学科卒。
元読売新聞大阪本社記者。
映画、ケルト文化、洋酒をテーマに執筆活動に励む。
日本ペンクラブ会員。関西大学非常勤講師。
著書に、『スペイン「ケルト」紀行～ガリシア地方を歩く』など多数。
最新刊は、『ビジュアル版・ヨーロッパ「ケルト」紀行』上巻(島編)・下巻(大陸編)。



スペイン「ケルト」紀行 ガリシア地方を歩く

武部 好伸 著
【税込定価】2,310円(本体:2,200円)
【出版社】彩流社
【ISBN】978-4-88202-647-1
【仕様】四六判 / 204ページ / 上製

ガリシアのビール

スペインを気候風土で一つにくくるのは、やはり難しい。

日本でも、北海道の気候風土と、

九州のそれとは随分差があるのと同じだ。

スペイン南部のアンダルシアは雨が少なく、

深い山はきわめて少ない。

スペイン北西部のガリシアは年間降雨量が多く、

したがって緑豊かで山が深い。

そして清らかな水、日本の田舎の風土に似通っている。

ガリシアをドライブすると、日本で車を走らせているかのような錯覚に陥ってしまう。

このような気候の中、ガリシアにホップの利いた美味しいビールがある。

日本のビールに例えると、“昔の麒麟ビール”の感がある。苦み走って、しかも爽やかな味わい、日本人好みだ。

その名も、エストレージャ・ガリシア (ESTRELLA GALICIA)、“ガリシアの星”という名前だ。

エストレージャ・ガリシアのメーカーは、“無敵艦隊”が出港したスペイン有数の港町ア・コルーニャにある。

1906年の創業、104年の歴史を誇っている。

ア・コルーニャ市内のクアトロ・カミノス(CUATRO CAMINOS)には、旧工場を改造したセルベセリア(ビアホール)がある。

そのセルベセリアにはビール製造用の大窯が当時のまま置かれビール工場だった趣を残している。

年間200万杯以上のビールがそのセルベセリアで飲まれ、

ア・コルーニャの観光地の一つになって、毎日賑わっている。

ガリシアでのエストレージャ・ガリシアの市場占有率はおよそ7

0%、ア・コルーニャにいたっては、90%を超える。

ア・コルーニャでエストレージャ・ガリシア以外のビールを飲もう

とするのは、一苦勞だ。

ほとんどのバルやレストランではビールはエストレージャ・ガリシアだけを置いている。

地元に密着し、地元の人に愛され続けるビール。日本における、地元の日本酒のような存在である。

しかし、創業100周年を契機にエストレージャ・ガリシアは、地元の地ビールの枠から世界の市場に向けて、進出を始めている。

すでに、アメリカ、メキシコ、ブラジルではかなり成功を収めている。アジア地域でも、日本、フィリピンで流通し始めている。

日本国内でも、スペインバル、レストランを中心に堅調な伸びを示している。

百貨店の店頭にも並び始めている。そして、中国市場の進出にも動き出している。

上海万博に現在大きなパビリオンを構え、広報活動にまい進している。

エストレージャ・ガリシアは、地元ガリシアのビールの枠を超え、インターナショナルなビールの域に達しようとしている。



白色と藍色をベースにした、ガリシアの有名な陶芸品



木村恭之

キムラヤスユキ/ Yasuyuki Kimura

1955年生まれ

早稲田大学卒業

スペインからワイン・ビール等を輸入し
日本全国に案内をしている酒類総合商社、
株式会社キムラ 代表取締役社長

スペインワイン教室を定期的に行っている。

広島スペイン協会 事務局長

スペイン留学経験者があなたをサポート
留学業界13年以上の経験と実績

スペインに特化した留学サポート会社

スペイン留学代行センター

☎03-3484-3388

詳しくは→ <http://www.spain-ryugaku.jp>

スペイン 留学代行

検索

スペイン語作文の方法(表現編)

小池和良 著 四六変形判 290頁 CD付 定価2,730円

課題文139・練習417題を訳しながら、文脈に応じた適切な語彙や表現を選択した上でスペイン語を書く力を養成。実践的な解説と豊富な例文によって、語彙の選択のミス避ける語感を習得。課題文139の日本語・スペイン語解答例を対訳形式でCDに収録。本書にでている語彙や表現を網羅した詳しいスペイン語・日本語索引。



〒162-0805 東京都新宿区矢来町106
Tel. (03)3267-8531 <http://www.daisan-shobo.co.jp>

第三書房

Cerca de 100.000 personas han asistido al encuentro en el que han participado los chefs más reconocidos

El Congreso **lomejordelagastronomia.com** cierra su edición más innovadora, popular e interactiva

En esta edición la alta cocina se ha dado la mano con la gastronomía más popular y tradicional



Alicante (9-11-2010)

El Congreso **lomejordelagastronomia.com** ha clausurado su edición más interactiva, cercana y popular. Durante cuatro días las más de 100.000 personas que han pasado por el recinto ferial de Alicante han podido conocer los secretos de la cocina de la mano de los mejores chefs, desde Ferrán Adriá a Martín Berasategui, pasando por Jöel Robuchón, Paco Torreblanca, Joan Roca, Yoshiaki Takazawa o Quique Dacosta, por poner sólo unos ejemplos de entre los más de 700 profesionales llegados de todo el mundo que han impartido clases magistrales o talleres.

Pero además de disfrutar de la alta cocina, los asistentes también han podido degustar los manjares más exquisitos, como la mejor Tortilla de Patata de España o la mejor Barra de pinchos y tapas, todo ello a precios populares.

Todo un festín para los sentidos en un congreso en el que las conferencias, talleres, concursos, actividades y demostraciones se han sucedido a un ritmo vertiginoso y que ha permitido a los asistentes conocer a la élite de la cocina actual, degustar sus platos y aprender sus secretos.

Nunca antes la alta cocina había sido tan interactiva ni estado tan cerca del público, ya que frente a lo que se pudiera pensar, la crisis económica y cultural actual no sólo no ha menguado la calidad del congreso, sino que ha sido aprovechada por su director, el crítico gastronómico Rafael García Santos, para dar una vuelta de tuerca a este evento que ha conseguido satisfacer tanto a los profesionales como al numeroso público que durante cuatro días ha abarrotado el recinto ferial.

Más información en www.lomejordelagastronomia.com



2010年9月中旬、東京・新宿バルト9を皮切りに、横浜と京都で「第7回ラテンビート映画祭」が開催された。毎年開催されるラテンビート映画祭では、日本未公開のスペイン語圏の映画が一举に上映される。京都での開幕作品「Paper Birds(原題:Pájaros de papel)」の上映時には、来日中のエミリオ・アラゴン(監督)とカルメン・マチ(主演女優)による舞台挨拶が行われた。そして上映後、スペイン情報誌[acueducto]の編集スタッフは、スペイン映画界の著名な監督と女優にインタビューする機会に恵まれた。

PÁJAROS de PAPEL

Soñar forma parte del viaje. Reír...una elección



【ストーリー】

舞台はスペイン内戦後のマドリッド。内戦の惨禍により妻子を亡くした喜劇役者ホルヘは悲嘆に暮れていた。1年後、相手のエンリケと再会したホルヘは、内戦で孤児となった戦災孤児のミゲルを引き取り、3人で家族のように暮らし始める。そして、ホルヘはミゲルの喜劇役者としての才能を見抜き、芸を教え込む。反体制派の容疑をかける軍の監視に怯えながらも気丈にふるまうホルヘと、彼を父のように心から慕うミゲル。戦争の傷跡が暗い影を落とす中、彼らに待ち受ける未来とは。スペイン内戦後、人々に笑いを届け続けた旅芸人一座の心温まる物語。

文(スペイン語) = Abel Álvarez Pereira

Acueducto: - ¿Qué tal os está tratando Japón?

Acueducto (以下A): 日本はいかがですか。

Emilio Aragón: Pues muy bien, hemos tenido mucha suerte porque yo ya había estado en Japón hace tres años y hemos tenido unos embajadores fantásticos. Unos amigos que viven aquí nos lo han hecho todo muy fácil, Haruka que es japonesa pero con alma española y Carlos un español con alma japonesa.

エミリオ・アラゴン (以下E): とても居心地がいいです。3年前の来日ですばらしい友人ができたおかげでしょうか。

- O sea, que estáis disfrutando de vuestra estancia aquí a pesar de todo lo que supone la promoción de vuestra película.

A: では日本滞在を楽しんでいらっしゃるわけですね。映画のプロモーションでなにかとお忙しいでしょうが。

Carmen Machi: ¡Muchísimo! Está siendo una estancia muy relajada. tenemos algo de tiempo para conocer el país pero ya nos tenemos que ir pronto.

カルメン・マチ (以下C): 本当に楽しんでいます。比較的余裕もあり観光もできましたが、もう帰らなければ。

Emilio: Sí, tenemos que presentar la película en el festival de San Sebastian dentro del ciclo Made in Spain.

E: そうなのです。サンセバスチャン映画祭のスペイン語ショーケース部門出品が決まっています。

- Os deseamos mucha suerte. ¿Cómo veis la acogida del público japonés tanto en Tokio como en Kioto de la película?

A: 幸運を祈っていますよ。東京や京都での映画の評判はいかがでしたか。

Carmen: Pues la verdad es que yo estoy muy sorprendida. No sé si cuando uno tiene tanta información de lo que ha pasado históricamente en cada país y tiene tanto conocimiento de lo que se habla no se da tanto valor como cuando no tienes datos. Yo creo que cuando la gente ve el desconocimiento de la historia de un país hace que haya más interés. Es un poco lo que pasa aquí, la gente también ignora lo que pasa. Durante una guerra y posguerra aquí en Japón estuvo prohibido el teatro y de ahí la pregunta de si existía teatro y la exhibición de los artistas en la época y todo eso yo creo que llama mucho la atención porque no saben si es una ficción, si se ha ambientado para hacer una película histórica,... entonces sorprende más porque estás contando una historia absolutamente real, con personajes fifty-ficticios (actores pero que interpretan una vida real no tan lejana).

C: 正直驚いています。歴史的な事実を含めて、ある国についての知識や情報がないということのインパクトは強いのでしょうか。十分に知っている時よりもずっと。余計に知りたくなる。日本もそうですね。戦中戦後の日本ではお芝居が禁じられていた。でもそこから疑問が生まれるのです。当時劇場はあったのか、芸術家はどのような表現をしたのか。歴史映画の中身は作りものなのか、と俄然興味がわく。映画で語られる歴史が全くの真実で、登場人物も実際のものに近いとわかると、びっくりするわけです。

Emilio: Sí, de hecho a mí me dieron una réplica de un cartel de la época (abril de 1940) del "Teatro Maravillas" (el primer teatro que empezó a funcionar en Madrid) y en la función de variedades actuaron mi abuelo y mis tíos abuelos.

E: 実際の登場人物といえば、マドリッド初の劇場、テアトロ・マラビーリャスの1940年当時のポスターを見ますと、バラエティーショーに私の祖父やその兄弟たちが出演していますね。

- Hablando un poco sobre la trama y el guión compartido entre Fernando Castets y tú, ¿Cómo surge la historia? ¿En qué o en quién os inspirasteis?

A: フェルナンド・カステツの脚本との二人三脚ですが、筋立てではどのようなところから生まれましたか?

Emilio: Pues en muchas cosas, sobre todo, desde el punto de vista de atmósfera en cosas que de mi familia que he escuchado, incluso de anécdotas que se han llevado a la historia y también de historia escuchadas a otros compañeros de profesión, también hubo mucha investigación sobre la guerra civil española y sobre la situación del teatro en aquella época, hubo mucho trabajo de preparación para hacer una historia creíble.

E: 家族をはじめ、いろいろな人から伝え聞いた逸話や笑い話から想像したり、スペイン内戦や当時の劇場の状況について深く調べたりして、本物らしさに近づけるための準備は惜しみませんでした。



エミリオ・アラゴン監督と女優のカルメン・マチさん

- Hablando un poco sobre el cine japonés ¿Tenéis algún director o actor que os llame la atención?

A: とこで日本映画はどうか。気になる監督や俳優はいますか。

Emilio: Pues la última película japonesa que he visto hace unos meses ha sido una de H. Koreeda, *Still Walking*. Además de Koreeda, evidentemente al Maestro Kurosawa lo tenemos en las venas. Yo creo que cualquier amante del cine ha visto toda la filmografía del Maestro y entre los directores jóvenes destaco *Despedidas*, que se ha llevado el *Oscar* a la mejor película extranjera en el 2009. Es un excelente ejercicio de cine independiente; es una muestra de como, con muy pocos elementos (personajes, decorados, etc.) puedes contar una historia sólida, con calado y con peso. Estas dos películas (*Despedidas* y *Still Walking*) son ejemplos clarísimos de que se puede hacer un cine maravilloso, magnífico y con pocos elementos. Ese es el ejercicio complicado, ahí es donde se ve la mano de un buen guionista y un buen director. Con una carrera similar a la mía, Takeshi Kitano, cómico que viene de la televisión y da el paso al cine, tiene la capacidad de sorprender, nunca te deja tibio.

E: 最近観たのは是枝監督のStill Walking (『歩いてても歩いてても』) です。言うまでもなく黒澤監督の映画はどれも必見に値しますし、若い監督の中では2009年にオスカー外国語映画部門で受賞した『おくりびと』が素晴らしいかったです。Still Walkingと同様に、登場人物やセットを最小限に抑えても、しっかりと重みのあるストーリーをつくることのできるといういい例ですね。脚本家と監督の腕が試されるところです。コメディアンである北野武監督も観客を飽きさせない驚くべき才能の持ち主ですね。

- Sí, podemos decir que Takeshi Kitano es el Emilio Aragón japonés, ¿Por qué muchos artistas y actores en un momento de la vida deciden hacerse directores de cine?

A:そうですね。彼は日本版エミリオ・アラゴンといったところですね。なぜ多くのアーティストや俳優が映画監督になろうと思うのでしょうか。

Emilio: Esto lo hemos hablado mucho Carmen y yo estos días. Yo creo que el cine es como una pequeña caja de bombones y a la persona que los coma le tienen que gustar. El cine tiene mucho de artesanal, eso es lo cautivador. Mantiene esa estructura tan griega de planteamiento, nudo y desenlace, y tienes solamente una oportunidad de hora y media o dos horas, dos horas y media si eres muy valiente, de cautivar al público. También tiene la posibilidad de contar una historia y de proyectarla en la paz y tranquilidad de una sala con una pantalla grande en donde cualquier pequeño gesto es importante y puede ser fundamental en la historia. Esta cualidad cualquier otro medio no la tiene y ese es el poder del cine.

E:そのことはよくカルメンと話しました。映画ってチョコレートの詰め合わせの小箱のようなものだと思うのです。手作りの感覚がつまむ人を必ずとりこにする。ギリシア的な問題提起や決着がぎゅっと詰められて、1時間や2時間そこの一本勝負で観客を魅了するのです。落ち着いた平和な一室で、大きな画面を凝視してストーリーを堪能できる、という他のメディアにはない魅力も大きいでしょうね。

- Carmen, ¿estás pensando en ser directora alguna vez?

A:カルメン、あなたはいつか映画監督をやってみようと思いますか。

Carmen: ¡No! Ni se me ha pasado por la cabeza. A mí me gusta mucho que me dirijan, que me manden...(risas).

C:考えたこともないです。指示されるほうがずっといいわ(笑)

- Hablando de mandar, ¿qué tal es trabajar con Emilio?

A:指示するエミリオとの仕事はいかがでしたか。

Carmen: Pues es muy fácil porque él te lo hace fácil; trabajar en esto es muy difícil. De hecho, en los tres medios en los que se mueve el actor (cine, teatro y televisión) considero al primero sin duda el más difícil. Cuando te pones en manos de alguien que está haciendo su *opera prima* -a pesar de que la trayectoria de Emilio es amplísima- es cuando a mí más me gusta trabajar, porque es un acontecimiento continuo.

C:やりやすかったです。そういう状況作りをしてもらえて。でもその中で演じるのはとても難しい。俳優の活躍の場は舞台やテレビなどありますが、映画がおそらく一番大変。でも代表作とも言える重要な作品の作りに身をゆだねるときに、私は一番やる気がでるのです。エミリオの作品は連続性がある深く壮大ですから。

- Todo es muy fresco ¿no? Además hay que poner toda la carne en el asador para demostrar lo que uno vale.

A:すべて新鮮だったでしょうね。捨て身の覚悟で挑まないと。

Carmen: Sí, exactamente, pero también pasa que Emilio es un tío muy majo pero muy perfeccionista porque es una película muy personal e importante para él. También ha metido en un saco muchas cosas que le han movido durante mucho tiempo y todo eso que tiene lo ha hecho como una coctelera pero de forma muy fácil sobre todo porque él es también artista y artista de los de delante de la cámara y de los que pisan unas tablas. Es muy diferente cuando trabajas con alguien que también es actor: entiende y sabe muchas cosas y trabaja desde otro lugar. Luego Emilio tiene tanto conocimiento... por ejemplo, el control

que ejerce sobre la música hace que sea un director con mucho sentido del ritmo y para un actor un ritmo adecuado es fundamental. Todo el equipo ha estado muy unido en el mismo barco y Emilio ha sido un gran capitán. Es una persona muy entrañable, cariñosa y que consigue de ti lo mejor porque es muy listo.

C:そのとおり。エミリオは魅力的な監督さんですからだいじょうぶでした。でも完璧主義者でもありました。なにせ彼にとっては個人的に大切な映画ですからね。ずっとかばんの中に温め続けてきたものを、カクテルを作るみたいにかけ混ぜて完成させたのです。いとも簡単に。ご自身がアーティストだからこそできる技で、カメラの前で演じる人たちにもその性質を与えてしまう。(彼は俳優でもあり、なんでもわかっています。そういう人と仕事をするのはやはりちがうものです。)音楽の持つインパクトも十分理解しているから、リズム感を持った監督のもとで演じる側もそれを楽しむわけです。優しく愛情たっぷり頭の切れるエミリオ船長率いる船で、私たち船員一同、本当に団結しました。

- ¿Me puedes explicar el título de "Pájaros de papel"?

A:Paper Birdsというタイトルについて説明していただけますか。

Emilio: El hecho del título de "Pájaros de papel" viene por dos caminos.

Por un lado, el personaje de ventrílocuo que hace Lluís Homar es un homenaje a un amigo de mi padre, que murió hace 6 años con 101 años, que se llamaba Wenceslao Moreno (conocido como el Señor Wences). Él vivía en Estados Unidos e incluso actuó en la Casa Blanca para Kennedy y para otras personas. Él es el único español que tiene una calle con su nombre en Manhattan. Bueno, a mí siempre me asombraba la facilidad que tenía para hacer ejercicios con la mano; también hacía mucha manipulación de cartas. Por otro lado, me parecía que servía de elemento de unión entre el personaje que perdió a su hijo (Jorge) y con el niño (Miguel). Hay dos "cordones umbilicales": uno es el lunar con la madre del niño y otros son los pajaritos de papel con el padre, pero al mismo tiempo, es una metáfora de la fragilidad del ser humano. Un pajarito de papel, tú lo puedes lanzar y puede llevar un buen vuelo. Sin embargo, a lo mejor si lo tiras bajo la lluvia con cuatro gotas cae a plomo. Es decir, el ser humano es tan frágil como el pájaro de papel.

E:二つの意味があります。ひとつは、ルイス・オマール演じる腹話術師にちなんで、6年前に101歳で亡くなったウェンセスラオ・モレーノという私の父の友人に敬意を表して彼を登場させたのです。セニョール・ウェンセスという名で有名だった彼は、おそらく手先が器用だったのです。マンハッタンで唯一、自分の名前のついた通りのあるアメリカ在住スペイン人で、ホワイトハウスでもケネディーなどの要人を前に演じた経歴があります。もうひとつは、息子ホルヘを亡くした父とミゲルという孤児を結ぶ要素として。ふたつの「へその緒」があって、文字通りに母との絆、そして父とつながる折り紙の小鳥たち。しかしそれは同時に人間のもろさの象徴でもあります。紙でできた小鳥は遠く飛ばすことができますが、小雨の中では垂直に落ちてしまう。つまり人間は紙の鳥ほどに脆弱な存在なのです。

(日本語訳・要約 飯塚美穂)



インタビュー後、acueducto編集スタッフと



【 監督・エミリオ・アラゴン (Emilio Aragón) 】

1959年キューバのハバナ生まれ。父はスペインの人気サーカス・アーティストであるミキ・アラゴン。テレビの人気ドラマ「Médico de familia」「El gran juego de la oca」「Noche, noche」では俳優兼ディレクターとして活躍するほか、数々の作曲も手がける。映画「Paper Birds」で監督として映画界デビュー。現在、新スペイン・チャンネル6の社長及びグローボメディア・グループ会社のプロデューサー。

【 主演女優・カルメン・マチ (Carmen Machi) 】

1963年スペインのマドリッド生まれ。スペインを代表する女優として、ペドロ・アルモドバル監督作品ほかに出演。主な出演作:「トーク・トゥ・ハー」(2001)、「Descongélate!」(2003)、「Vida y color」(2004)、「Un rey en la Habana」(2005)「ボルベール<帰郷>」(2006)、「Lo mejor de mí」(2006)「La mujer sin piano」(2009)、「抱擁のかげら」(2009)



『Paper Birds』 映画レビュー

Emilio Aragón hace honor a sus orígenes circenses y aquí podemos asegurar que hace de auténtico “domador de corazones”, que te lleva de la risa al llanto en cuestión de segundos si te dejas llevar por la envolvente historia arropada por la banda sonora compuesta por el propio Emilio. Es, sin duda, una película para ver en aquellos cines que tanto añoro hoy en día, con una pantalla enorme, un telón granate medio caído, sentado en una butaca incómoda y con ese olor rancio a cerrado. En una época y en un país donde lo viejo se tira y se olvida, donde lo instantáneo prima, donde la tecnología es religión, se agradece este guiño a los valores humanos, donde las personas y la historia son los verdaderos protagonistas y por esto, sobre todo, la película es muy recomendable para el público japonés. Especial mención para Imanol Arias que hace que esta historia sea creíble en una de sus mejores interpretaciones, por no decir la mejor hasta la fecha.

エミリオ・アラゴンは史実に忠実に従い、人の心をつかむような秀逸なドラマを完成させました。彼自身の作曲によるサウンドトラックに包まれて、観客は一瞬にして笑いと涙の世界に誘われてきます。今は懐かしい半ばうらぶれた映画館で、こもったような匂いの中、座り心地の悪いシートにこしかけ、半開きの赤黒い天幕に巨大スクリーンで見たくなるような映画です。技術ばかりが先行して古いものが忘れ去られるこの時代に、人間と歴史が本当の主人公であるような人間的価値に触れたこの映画は、日本の皆さんにぜひお勧めしたいものです。また、ストーリーに信憑性を与えたイマノル・アリアスの素晴らしい演技は、筆舌に値するものです。

(日本語訳・要約 飯塚美穂)

映画情報



『Paper Birds』(スペイン語題:Pájaros de papel)

2011年秋、銀座テアトルシネマ他、全国順次公開。

第34回モントリオール世界映画祭First Films World Competition部門・観客賞受賞。

スペイン映画/115分 映画配給会社:アルシネテラン。

監督:エミリオ・アラゴン(Emilio Aragón)

脚本:フェルナンド・カステツ(Fernando Castets)

キャスト:ロジェール・ピリンセツ(ミゲル役)、イマノル・アリアス(ホルヘ役)、リュイ・オマル(エンリケ役)、カルメン・マチ(ロシオ役)。

日本語字幕:林かんな

映画の公式HP:<http://www.pajarosdepapel.com/>



映画
『Paper Birds』より

Diez razones para ir a ver *Pájaros de Papel*

1. Para emocionarse en la sala de cine.
2. Por una historia muy lograda en la que se rinde homenaje a los artistas de variedades.
3. Por el guión de Fernando Castets y Emilio Aragón, hecho con el corazón.
4. Para ver a un elenco de actores que están todos sensacionales: Imanol Arias, Lluís Homar, Roger Princep, Carmen Machi, Luis Varela, Lola Baldrich, Fernando Cayo, José Ángel Egido, Asunción Balaguer, Emilio Aragón Bermúdez "Miliki", Diego Martín y Cristina Marcos.
5. Por la excelente fotografía.
6. Por su ambientación mimética.
7. Por su música, en la que hay desde números de variedades y ritmos de la época hasta un score orquestal de gran calado. Entre los músicos están Josemi Carmona (Ketama), Kepa Junquera (el acordeonista vasco, trikitixa), Ara Malikian (Violín) y Pepe Habichuela (guitarrista flamenco).
8. Para divertirse en la proyección y pensar después.
9. Para comprobar que no es una película más sobre la guerra civil española o la posguerra.
10. Para conocer un poco la historia española.

映画「PAPER BIRDS」の10の見所 日本語要約

1. 映画館で感動できる作品である
2. さまざまなアーティストへオマージュを捧げるストーリー
3. 愛情のこもった脚本
4. 多彩な顔ぶれのキャスト陣の情味を感じさせる演技
5. 映像の素晴らしさ
6. 当時の様子を再現する背景やセット
7. 当時の音楽やリズムからオーケストラ音楽まで、音楽の多様さ
8. 楽しめるとともに考えさせられる作品
9. 単にスペイン内戦と戦後の映画というだけではない作品
10. スペインの歴史について知識を深めることができる



Abel Álvarez Pereira

アベル・アルバレス・ペレイラ

Nació en Galicia (España) en el año 1972.

Profesor de Arte y español.

Licenciado en Bellas Artes por la Universidad de Vigo y Educación artística por la Universidad de Santiago de Compostela.

Posgraduado en E.L.E. por la Universidad de León.

Actualmente vive en Japón donde trabaja como profesor en las Universidades de Estudios Extranjeros de Kioto, Ritsumeikan y Ryukoku así como en JICA (Japanese International Cooperation Agency) y ejerce como examinador de los exámenes de D.E.L.E. Colabora para la revista "acueducto" desde su primer número.

Amante del arte en todos sus ámbitos desde la pintura hasta la música pasando por el cine, la fotografía, la literatura, etc.

Ha ganado varios certámenes de dibujo y pintura en España, publicado dos álbumes de música como cantante y pianista junto a su banda.

1972年スペイン、ガリシア生まれ。スペイン語・美術の講師。

ビーゴ大学卒業。専攻は美術。サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学卒業、芸術教育専攻。

レオン大学大学院で、スペイン語教授法を学んだ。

現在は日本在住。京都外国語大学、立命館大学、龍谷大学やJICA等の講師を勤める傍ら、DELE試験の面接官でもある。

また、本誌acueductoの発行には第一号より携わっている。

絵画から音楽、映画、写真、文学等、全ての分野の芸術を愛好。スペインでは、多数のデッサン・絵画コンクールにおいて入賞、歌手・ピアノ奏者としてバンドとともに2枚の音楽アルバムを発表している。

名旋律は永遠に

www.enforex.com / japanese

DELE検定試験対策コース
エンフォレックスで学んだ学生
のDELE検定試験合格率は、90%
以上です！

初級レベル
中級レベル
上級レベル



厳選された
24校

スペイン語学校
スペイン&ラテンアメリカ

ヘッドオフィス

Alberto Aguilera, 26
28015 Madrid - España
Tel.: +34 91 594 37 76
Fax: +34 91 594 51 59
Email: info@enforex.es
www.enforex.com



Enforex

LIBROS
ADELANTE書店

スペイン語の本 & 雑貨

www.

adelante
shop.jp

TEL/FAX: 06-6346-5554

「タララー、タ・タ・ターンタラッタ・タララーン」

これだけで、何の曲かがわかった人はすごい。が、音程をつけて歌えば、きっと誰もが「ああ、それね!」とわかってしまうのが、このメロディのすごいところだ。20世紀クラシックの「ベストヒット・メロディ賞」の名にふさわしい(いつの間に受賞?)、この名旋律を作曲したのは、ホアキン・ロドリゴ。1999年に亡くなった、盲目の巨匠である。

その年、私はマドリードにいた。小さいトランクひとつ携えて単身乗り込み、一晚1000円あまりの安オスタルでひと月暮らしながら住居を探し、—— といった話せば長い話はとりあえず飛ばすとして、7月のある朝である。いつものように、通っていた語学アカデミアのドアを開けると、校長のアンヘレスが開口一番、「Ay, シズカ! マエストロが亡くなってしまったね...我々は偉大なアルティスタを失ったわ!」

ここはさすがにスペイン人、落胆と悲しみを実に豊かに表現している彼女を前に、感情を共有できずキョトンとせざるを得なかった私。マエストロって、誰のことだろう?...なんといっても、マドリードでの生活が始まってまだ数か月。テレビもなく新聞をかうわけでもなく、滑舌いいけど超早口で理解不能、聞いているとトランス状態にでも陥りそうなスペイン語のラジオ放送と、日本から唯一持ってきていた宇多田ヒカルのCDで、1人寂しい夜をしのいでいた時期である。その前日、100歳を目前にして、あのマエストロ・ロドリゴがこの世を去ったことを知らなかったのだった。同じマドリードにしながら、お会いすることがかなわなかった大作作曲家...スペインに生まれ、4歳で失明、その後20世紀をほぼまるまる生き抜いたロドリゴが、その耳で聞き、肌で感じ、表現したことはなんだったのだろうか? —— 私は、皮肉にも彼の死がきっかけとなって、その「人と音楽」を知りたいと思うようになったのだった。

さて、冒頭の「タララー...」は、ロドリゴの代表作《アランフェス協奏曲》第2楽章のテーマである。あまりにも名曲ゆえ、ジャズ、ポピュラー、お笑いといろいろなジャンル

でアレンジされているから、ともすると「メロディは知っているけど、実はオリジナル編成では聴いていない」という方も少なくないかもしれない。私も実は、オリジナルを聴いたのはずいぶんあとになってからのことで、ジャズの巨星マイルス・デイビスの《スケッチ・オブ・スペイン》のほうに先に耳についていたりしたのだった。

《アランフェス協奏曲》の功績のひとつは、「ギターとオーケストラ」という組み合わせによる協奏曲の可能性を広く知らしめたこと。もっとも、この編成はとても珍しいようでいて、それ以前から存在していたのだが、ともあれこの曲によって、独奏楽器としてのギターにあらためて光があてられたことは間違いないだろう。2楽章の冒頭で「タララー」を奏するのは、実はギターではなくイングリッシュ・ホルンで、ギターはまず、伴奏のアルペジオを担当する。そうしてひとしきりテーマが提示されたあと、あらためてテーマが独奏のギターにわたされ、以後はギターとオーケストラで交互に会話をするように進んでいくわけだが、このテーマが、実にシンプルにできていることに驚かされる。表面的にみれば、ほとんど順次進行で上がったたり下がったりしているだけなのだ。ロドリゴは、それだけでこの名旋律を生み出したのだった。折しも、調性音楽に限界を感じたゲンダイオンガクの実験が様ざま行われモダンに向かう時代、また、国際的に「スペイン音楽」というとどうしてもアンダルシア的なものを期待されがちだった状況下で、あえてこのような音楽を書いたというところに、ロドリゴが目指していたもの、というよりむしろ、目指さなかったものが見えるような気がする。しかし、この曲が人々の心をとらえるのは、単に「シンプルでわかりやすい」からではない。私たちは、ギターのつま弾きにいざなわれながら、そこに息づくロドリゴの心を感じとり、その心とともに「生きている」のではないだろうか。素晴らしい音楽にはそんな不思議な力があり、そして私たちには本来、感じとる能力がちゃんと備わっているのである。(ファリャが言ったように、「音楽は理解するものでなく感じるもの」だから、頭で理解させようとする音楽は確かにムズカしいと思わせてしまうのかもしれない。)この2楽章の旋律は、愛妻ヴィクトリアとの新婚旅行で散策した古都アランフェスの美しい庭園の思い出が



下山 静香

しもやましずか / Shizuka Shimoyama

桐朋学園大学卒。文化庁派遣芸術家在外研修員としてスペインへ渡り、マドリード、バルセロナで研鑽。スペイン各地に招かれリサイタルを行い、「スペインの心を持つピアニスト」と賞される。ラジオ、テレビ番組に多数出演、これまでに4枚のCDをリリース。現在、スペイン・中南米音楽を含む多彩なレパートリーと柔軟な感性をもつピアニストとして活発な演奏活動を展開。またクラシック界にあって、翻訳・執筆・舞踊・トーク...とマルチにこなすユニークな存在として注目を浴びている。東京藝術大学、桐朋学園大学各非常勤講師。

Official Web Site サラバンダ <http://www.h7.dion.ne.jp/~shizupf>

裸足のピアニスト・下山静香のブログ <http://ameblo.jp/shizukamusica>



アランフェスの宮殿

らインスピレーションを得ている、と作曲家自身も語っているが、その一方で、作曲当時、社会的にみればスペイン内戦という悲劇が、プライベートでは、初めて授かった我が子を失うという悲劇がロドリゴを襲っていたという背景がある。その絶望的な悲しみのなかにあって、だからこそ、美しい音楽を創り出すという生みの苦しみ——それらを乗り越えて、内戦終結の年に完成、翌年バルセロナで初演されたこの《アランフェス協奏曲》は、内戦で深く傷つき疲弊していたスペインの人々の心を癒したのである。

「芸術作品と、その作者の私生活は切り離して考えるべきだ」という意見を耳にすることもあるが、真の芸術家にとって「創作」は「生きること」と同義である以上、やはり切り離すことはできないはず。そして、「個」の生活は必ず「世界」と関わっている…。音楽って、そのはざまをつないで行き来する天使のようなものなのではないかしら、と想ったりするのだった。ちなみに、とすると2楽章の陰に隠れがちな1楽章、3楽章は明るく快活な楽想で、ロドリゴがこの作品にオマージュとして込めた18世紀スペイン、いわゆる「ゴヤの時代」の生き生きとした雰囲気が伝わってくる。これら全ての楽章があいまって、《アランフェス協奏曲》は人々に再び生きていく希望を与えたのだと想像するに難くない。そしてほどなく、このスペイン色あふれる作品は「世界的な名曲」として愛されるようになったのである。

ところで、ロドリゴに興味を持ち始めた私はどうしたか。演奏家とは、ある音楽に興味を持ったらそれを実際に演奏してみないと気が済まなくなる人種である。基本

的には“再現の芸術”であるクラシックの演奏家は、楽譜から読み取ったものを繰り返し演奏し、自分の身体になじませていくことによって初めて、その音楽を「理解する」ことが可能となるからである（結構、肉体派でもあるのだ）。といっても、その理解への道に終わりはないのがミソだが、とにかく弾かないことには何も始まらない…。そんなこちらの思いを見抜いたかのように、マドリードでのピアノの師匠ロサ・マリアは、無謀にも、私にロドリゴ作品の全曲演奏をすすめてくれた。彼女は、ロドリゴのピアノ作品を高く評価していたのだが、一般的に知られていないだけでなく、音楽界でもあまり取りあげられないことをかねてから残念がっていたのだ。そこへ、遠い東の果ての国ハボンから、スペイン音楽ならなんでも知りたいらしい女の子（年齢アラウンド70の彼女からすれば、“女の子”で間違いないと思う）が、ポーンと飛び込んできたのである。しかも、ロドリゴ生誕100年のメモリアル・イヤーが間近にせまるグッド・タイミング。そんないろいろな条件が合致して、私はロドリゴのピアノ曲の数々を一から勉強し始めることになった。

「ロドリゴのピアノ曲って、アルベニスともグラナドスともずいぶん違うなあ。でもなんだか、とても“スペイン的”な感じがする!」…

かくして、マドリードの街を日々歩き回ってその空気を吸い、暗譜に苦労しながら“誰も弾かないロドリゴ”を練習していく生活のなかで、私は「スペイン的」なるものの扉を開いていくことになる。

その正体については、また、次回。

（文・写真 下山静香）

確かな技術と音楽する心を育てる

吉川二郎ギター教室 初心者歓迎！

コンサートフラメンコギター
クラシックギター

花屋敷教室(宝塚市)

天満橋教室(大阪市)

東京教室(月1回)

静岡教室(月1回)

ギターサークルJIRO(富士市)

お問合せ・入会のお申込みは

TEL.072-793-8684

詳しくはホームページで

吉川二郎 検索

nm
APRENDE
ESPAÑOL EN
SEGOVIA

Turismo de
Segovia

スペインフェア

2011

2月19日(土) 11:30-21:00

20日(日) 10:00-19:30

大阪市中心公会堂 地下1階 大会議室

問合せ: 06-6346-5554

<http://www.spainbunka.jp/spainfair>



Centro Cultural Español
スペイン文化センター



「スペインのギリシャ人」

ドメニコス・テオトコプーロス、後にエル・グレコと呼ばれた男がスペインの地を踏んだのは1576年、彼が35歳になった年だった。エル・グレコは1541年にギリシャのクレタ島で生まれた。27歳の時にヴェネツィアへ赴き、その後ローマを経てスペインに移住した。ギリシャで既に画家として活躍していたという記録が残されているものの、なぜ彼がギリシャからイタリアを経由してスペインに渡ったのか、はっきりした動機は分かっていない。仕事の口を求めてイタリアに赴いたものの、当地ではティツィアーノを始めティントレット、ヴェロネーゼら、名だたる画家が活躍しており、年若い異邦人の画家が入り込む余地がなかったために、パトロンを求めてスペインに移動したというのが最も有力な説である。しかし、もしこれが真実であれば、彼のスペインでの生活は、出だしから大きく躓いたことになる。

スペインに渡ったグレコは、《神聖同盟の寓意》でフェリペ2世の歓心を得たものの、次に描いた《聖マウリティウスの殉教》で王の不興を買い、国王付きの画家となる事に失敗した。今日、この2枚の絵はマドリードの北にあるエル・エスコリアル修道院に収蔵されている。また、現代ではエル・グレコの傑作のうちの1つと数えられる《聖衣剥奪》の制作の際にも、作品の査定金額を巡り、注文主のトレド大聖堂と裁判沙汰を起こしている。国王とトレド大聖堂という、国内最大のパトロンを2つもしくじったグレコは、その後も注文主を相手に、金銭トラブルから来る裁判沙汰を幾度も起こす事になる。

そもそも当時のスペインは、同時代、芸術の中心地であったイタリアと比較して、著しく画家の社会的地位が低かった。その上、1492年のレコンキスタ終了以降、スペイン国王がカトリックの教えを礎に、国家を統一せんと試みた事も、画家の地位の向上を送らせる一因となっていた。1547年から3度にわたって開かれたトレント公会議によって、「聖なる画像は、見るものに祈る気を起こさせるものでなくてはならない。」という取り決めがなされた後、1577年にトレド大司教に就任したガスパール・デ・キローガにより、トレント公会議に基づく対宗教改革の路線が強力に押し進められ、絵画の主題や図像などが大幅に制限されていたのである。画家が自らの裁量を発揮して絵を描くチャンスは極めて限られていたのだ。イタリアで、芸術家として高い地位を誇っていた画家達を目の当たりにしていたグレコにとって、スペインで絵を描くことは、大いなる困難を伴ったに違いない。

しかし、グレコはスペインを離れる事は無かった。その後も、サント・トメ教会の《オルガス伯の埋葬》を始めとし、ドニャ・マリア・デ・アラゴン学院の主祭壇画と呼ばれる一連の祭壇画や、数々の肖像画、宗教画など多くの傑作



をスペインの地で生み出している。グレコはスペインの地で、絵画に課せられた様々な条件を満たしながらも、暗い背景から浮かび上がるような人物描写や、うねりながら上昇する大気といった独特の表現を極めていったのである。イタリアで描かれたグレコの作品は、巧みではあるものの、どこかイタリア人画家の二番煎じを思わせる凡庸なものであった。しかし、スペインに渡ってからのグレコは、独自の画風を極限まで追求し、他の追随を許さない作品を生み出したのである。エル・グレコと聞いて、我々が思い浮かべるような作品は全て、スペインで生まれたのだ。グレコの画風の完成に、スペイン、特に彼の終の住処となったトレドと言う環境が大きな影響を及ぼした事は間違いない。20世紀の後半になって、元プラド美術館館長ハビエル・サラスによって、グレコの直筆の書き込みが残されたヴァザーリの『美術家列伝』が、フェルナンド・マリアースとアウグスティン・プスタマンテによってグレコの注記の入ったウィトルウィウスの『建築論』が立て続けに発見された事により、グレコの画家としての思索の一端が明らかになった。しかし、スペイン、特にトレドと言う地が彼に及ぼした影響に関しては、これらの発見をしてもほとんど伺い知る事が出来ないのである。

今日、トレドに赴けば、昔ながらの町並みと、入り組んだ小道の狭間に、古の名残を見つける事が出来るだろう。しかし、「ギリシャ人」と呼ばれた男がこの場所で何を見、そして何を考えたのか、今の我々にはただ思いを馳せることしかできない。

尾崎恵子



尾崎恵子

おぎきけいこ / Keiko Ozaki

1984年10月31日生まれ。兵庫県宝塚市出身。16歳のときに家族旅行でトレドに赴き、そこで目にしたエル・グレコの《聖衣剥奪》に衝撃を受ける。

現在大学で西洋美術史を専攻し、スペイン美術の研究を行っている。

スペイン語圏 子どもの本めぐり(1)

スペイン語圏のどのような児童文学が日本で翻訳出版されているかは、スペイン好き、本好きの方でも、意外と知らないようです。日本で出版される年間1万点以上の本のうち、スペインの子どもの本はほんのひとりにぎりなので無理ありません。

しかし、それはもったいない話です。子どもの本を「お子様向け」とばかりにすることなかれ。たくさん知識がない子どもにもわかるよう、作り手が心をくだいて作り上げた子どもの本には、大人の本にない間口の広さとわかりやすさ、親しみやすさがあります。また絵本には、スペイン人らしいセンスや美的感覚が生き、スペインの人々のようすや景色を目で見る楽しさもあります。40代以上の方は特に、自分が子どもの頃に読んだ本への先入観をいったん脇におき、今の児童書をぜひ手にとってみてほしいと思います。テーマも書き方も多様化し、思った以上に豊かな世界が開けているのがわかるはずです。

連載第1回目の今回は、秋にちなんだ本、食べ物、スポーツ、読書、芸術にまつわる本をご紹介します。図書館や書店でさがしてみるもよし、だれかにプレゼントするもよし。これを機に手にしていただければうれしいです。



1 『きみは太陽のようにきれいだよ』

チェマ・エラス作／ロサ・オスナ絵／福島麻紀訳／童話屋／2007年／1575円／小学生以上

敬老の日にぴったりの大人の絵本。おばあさんは、もう自分には似合わないパーティーに行きたがりません。けれども、おじいさんは、「きみは太陽のようにきれいだよ」とおばあさんを説得。おばあさんは、とうとうおじいさんとパーティーへ！ シャイで、素直に気持ちを伝えられない日本の男性の方々、奥さまへのプレゼントにもいかがですか？

2 『はしれ!カボチャ』

エバ・メフト作／アンドレ・レトリア絵／宇野和美訳／小学館／2008年／1575円／幼児から

孫娘の結婚式へ出かけたおばあさん。行く途中でやりすでしたオオカミとクマとライオンに襲われないように、帰り道は大きなカボチャの中に入るところがっています。ゴロン、ゴロン、カボチャよはしれ、はしれよカボチャ、ゴロンゴロン！ ハロウィーンの季節に、言葉の繰り返し楽しいポルトガルの昔話。著者はガリシアの人。

3 『コドリーロのおやつ』

ロベルト・アリアーガ作／ちばみなこ絵／宇野和美訳／光村教育図書／2009年／1470円／幼児から

おなかのすいたワニの子コドリーロ。ところが、卵を抱いているママはかまってくれません。一人でおやつをさがしにいけますが……。日本人のイラストレータとスペインの人気作家のコラボレーション。くいしんぼうの子が喜びそう。親子で読むのにぴったりです。

4 『めがねっこマノリート』

エルビラ・リンド作／E・ウルベルアーガ絵／とどろきしずか訳／小学館／2005年／1050円／小学校中学年から

マドリードの下町に住む8歳のマノリートは、自分ではそんなつもりはないのに、ママや先生に叱られてばかり。でも、おじいちゃんはいつも味方。そんな1年間をマノリート自身が語ります。クレヨンしんちゃんに通じる風刺とおかしみのある、スペインの子どもたちに大人気の作品。ユーモア感覚の違いも、スペインを知る読者には興味深いところです。

5 『ラウルにあこがれて』

ホセ・マリア・プラサ作／金関あさ訳／穂高書店／2005年／本体1995円／小学校高学年から

ラファはマドリードに住む小学生。レアル・マドリードのスター選手ラウルにあこがれ、サッカーを通して成長していきます。ボールさえあれば、どこでもすぐサッカーが始まるスペイン。W杯優勝国スペインのサッカー文化に触れてみませんか？

6 『ベラスケスの十字の謎』

エリアセル・カンシーノ作／宇野和美訳／徳間書店／2006年／1470円／中学生から

ブラド美術館にあるベラスケスの最高傑作「ラス・メニナス」。その右すみに描かれた小人ニコラスが、名画の2つの謎にフィクションなこたえを与える形で、ベラスケスの人となり、芸術観、当時の宮廷のようすに迫ります。大人にも読みごたえ十分のYA。

don Quijote
in-country Spanish language courses

11カ国にある
35のスペイン語学校



プレミアム
スペイン語コース



ビジネスコース



インターンシップ

ヘッドオフィス

Calle Placentinos, 2
37008 Salamanca - España
Tel.: +34 923 26 88 60
Fax: +34 923 26 88 15
infocentral@donquijote.org
www.donquijote.org

LIBROS
ADELANTE書店

スペイン語の本 & 雑貨

www.

adelante
shop.jp

TEL/FAX: 06-6346-5554

1



2



3



4



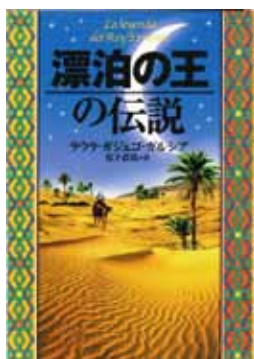
5



6



7



8



9



7

『漂泊の王の伝説』

ラウラ・ガジェゴ・ガルシア作／松下直弘訳／偕成社／2008年／1575円／中学生から

うぬぼれの強い王子は、詩のコンクールで自分を破った絨毯織りに無理難題をつきつけます。ところが、それゆえ砂漠をさすらうことに。6世紀アラビアに実在の詩人をモデルにした壮大なファンタジー。ガジェゴ・ガルシアは、現代スペインのベストセラー作家です。

8

『イスカandalと伝説の庭園』

ジョアン・マヌエル・グズベルト作／アルベルト・ウルディアレス絵／宇野和美訳／徳間書店／1999年／1365円／中学生から

舞台は中世のアラビア。世継ぎを持たない王は当代随一と言われる建築師に、この世に類のない庭園

をつくらせます。ところが、庭園が完成したとき建築師を待っていたのは、ほうびではなく幽閉という仕打ちでした。建築師は王の陰謀にどう立ち向かうのでしょうか。イスラム建築とスペインのかかわりの深さを思わせる、詩情豊かな名作です。

9

『まだ名前のない小さな本』

ホセ・アントニオ・ミリャン作／ペリーコ・パストール絵／安藤哲行訳／晶文社／2005年／1680円（絶版）／中学生から

主人公は、「むかしむかし」と「おしまい」の2行しかない小さな本。自分がなかなか大きくなれない理由を知ろうと旅に出ます。本の世界のしゃれたメタファーとしても読めるスペインのロングセラー。作者はEl País紙のコラムニストとしても知られる人気作家です。

宇野和美

うのかずみ / Kazumi Uno

1960年生まれ。東京外国語大学卒。

1999年より2年半、3人の子を伴いバルセロナ自治大学大学院に留学。

ミランフ洋書店（スペインの子どもの本専門ネット書店）<http://www.miranfu.com>店長。

イスパニカ通信添削講座講師。児童文学を中心に訳書多数。

日本で活動するスペイン関連クラブのご紹介

第3回 関西外国語大学フラメンコ部 Andà Jaleo

「和気藹々」という言葉がぴったりの雰囲気を持つ関西外国語大学所属フラメンコ部Anda Jaleoです。現在2年生が6人1年生が7人の、計13人が元気に活動しております。

活動内容としては、夏は館山で冬は東京で合宿に参加し、文化博覧祭や大学祭での公演、出演依頼を寄せていただいた際には出演させていただいております。

現2年生が入るまで現3年生の先輩が約1年間、一人で部活を維持して下さったおかげで私達はフラメンコの世界に足を踏み入れることが出来ました。未熟さゆえに問題に直面したり悩むことも多いですが、周りの方々の助言や激励によって、私達は強くなり前を向いて歩くことができます。

最近、とても光栄なことに出演依頼を寄せて下さる方々が増え、様々な場所で豊富な経験を積ませていただくことが出来るようになりました。

私達はそんな風に支えられているAnda Jaleoの公演を一人でも多くの方々に観ていただき、一緒に楽しんでいただけるよう、邁進していきたいと思っております。

(写真・文 関西外国語大学フラメンコ部 Anda Jaleo)



Spanish Communications

スパニッシュコミュニケーションズはみなさんのスペイン留学をサポートします。

春休みを利用して2～8週間のスペイン短期留学をしてみませんか。
ご希望の場所・期間を伺い、留学プランを提案します。まずはご連絡ください。

スペイン専門の
留学エージェント

スペイン各地の
語学学校のほか、
スペインの大学
(語学コース)を
紹介・手続き

学校への手続き、
ビザ申請書の作成、出発前
オリエンテーション等、
スペイン留学全般をサポート

留学概算費用とともに
留学プランを提案します
(無料)



(株) スパニッシュコミュニケーションズ 〒140-0015 東京都品川区西大井 2-14-2, 7F
TEL: 03-5709-9251 FAX: 03-5709-9241 e-mail : info@spacom.jp website : www.spacom.jp

8年ぶりのゼネスト

バルセロナ現地レポート

9月29日、スペイン民主化後最悪ともいわれる経済危機の中で行われたゼネストだが、その実なんだか目的がよくわからないストでもあった。

10年近く続いた不動産バブル景気に翳りが見え始めたのは2007年だが、2008年の金融危機の影響で深刻さを増したのはいうまでもない。サパテロ政権は当初、80億ユーロ規模の市町村公共事業プランや失業手当支給枠の拡大などで乗り切ろうとしてきた。それが一転、公務員給与の引き下げや年金額の凍結などを含む財政支出削減策に転じたのは今年5月、スペインの財政危機に対する市場の懸念をどうしても払拭しなければならない必要に迫られてのことであった。

この2年ほどで失業率がすでに20%近くに達するというひどい状況にもかかわらず、二大労組のUGTとCC.OO.が目だった動きを示してこなかったのは、「社会福祉支出はカットせず拡大し続ける(そして二大労組への潤沢な助成も維持する)」というサパテロ首相の姿勢に、実は特に反対することがなかったからでもあった。だからこそ、世論もマスコミも、5月の政策転換をきっかけに二大労組がいよいよゼネストに打って出るのではないかと注目したのだが、両労組書記長の反応はどうも煮え切らない。↑

確かに6月8日には公務員のストが全国各地で行われたが、ゼネストの決行が本決まりになったのはバカンス突入が目前にせまった6月末であった。名目は財政削減に続いて政府が決定した労働市場改革への抗議。それにしても、9月29日というストの日程は、まるでしっかり夏休みをとった後でおもむろにストの準備にとりかかるつもりか…とでもいいくなる(因みにCC.OO.のフェルナンデス・トチョ書記長のバカンスはバルト海豪華クルージングだったようで、9月になってから一部のマスコミで写真入りで報じられていた)。

ともかくもスト当日、様子を見ようとバルセロナの町に出てみた。他の主要都市同様、交通機関でストの影響が目立ち、出勤の足を失った労働者も多かった。カタルーニャ広場や大学広場付近の中心街の商店は軒並みシャッターを下ろしていたが、組合旗をふりかざし揃いのTシャツでまわってくる二大労組のピケ隊への用心のようである。そのピケ隊もいささかお腹の出た面々ばかりで、不景気で本当に深刻な状況に陥っている人々の面影はない。数区画離れると、商店もレストランも営業中だった。



正午近くに通りがかったカタルーニャ広場で、ちょっとした騒ぎに遭遇した。旧バネスト銀行ビルを占拠したグループが檄を飛ばし、ビラを配っている。ビルの壁にはカタルーニャ語で「政府は我々に嘘をつき、資本家は我々を搾取し、UGTとCC.OO.は我々を売った」と書きなぐられていた。長居しなかったからよかったようなものの、後で聞いたところではこの後州警察と小競り合いで双方怪我人が出たり、市警察のバトカーやごみコンテナに火がつけられたり、近くのジーンズショップと携帯電話の店が暴徒の略奪にあったりと、ずいぶん荒れたらしい。

ストの翌日、UGTのメンデス書記長はデ・ラ・ベガ第一副首相とラジオ番組で仲良く同席していた。政府は一旦決定してしまった労働市場改革を撤回するつもりは全くないようである。思えば一体何のためのストだったのか… 一つだけ確かなのは、ストのおかげで多くの小売店が一日の売上を減らし、やむなく仕事を休まざるをえなかった勤め人が一日分の給料を棒に振ったということかもしれない。

市川秋子



市川 秋子

いちかわあきこ / Akiko Ichikawa

1963年生まれ。

御茶ノ水女子大学卒、上智大学大学院博士課程(前期)およびバルセロナ自治大学博士課程修了。大学非常勤講師、在バルセロナ日本国総領事館専門調査員、在マドリッド日本国大使館専門調査員を経て、現在通翻訳・コーディネート業。
共訳に「発禁カタルーニャ現代史」(現代企画室)、共著に「バルセロナ・カタルーニャ美術散歩」(JTB)、「バルセロナ散歩」(行路社)、「ヨーロッパ読本・スペイン」(河出書房新社)がある。



Hola. はじめてのスペイン語講座第3回目です。

第1回目と第2回目では、動詞SERとESTARについて学習しましたね。この二つの動詞はどちらも不規則活用する動詞にあたるので、原形とかけ離れた活用後の姿に驚かれたのではないのでしょうか？

スペイン語にはこの二つの動詞のように不規則活用する動詞がありますが、多くは規則活用をする動詞です。これら規則活用をする動詞は、いったん活用のパターンを覚えてしまえば、どれも同じように活用できるので、楽チンです。ここでは、直説法現在形の規則活用について勉強します。

まず、活用のパターンは3種類あります。

- ①動詞の語尾が<ar>で終わる **-ar 動詞**
- ②動詞の語尾が<er>で終わる **-er 動詞**
- ③動詞の語尾が<ir>で終わる **-ir 動詞**

では、1パターンずつ見ていきましょう！



まず最初は、**-ar 動詞**です。

『話す』を意味する動詞<HABLAR>を例にしてみましょう！

規則活用する動詞の場合、必ず、

①活用しても変わらないコアとなる<語幹>

②活用して変化する部分

の2つの部分に分かれます。

動詞の語尾につく<ar>, <er>, <ir>が②の活用変化する部分にあたりますので、

HABLARからおしりの**AR**をとった**HABL**が①の語幹にあたります。

この**HABL**は主語がどれだけ変わっても、変わることはありません

では、次に下の表を見てください。

赤字で表した部分が活用後の形となります。主語によって少しずつ変化していますね。

規則活用をする-ar動詞は、どれも下の表と同じ形で活用可能です。

右にあるその他の-ar動詞についても同様に活用してみましょう、



覚えましょう！
＜規則動詞HABLARの活用＞

	単数		複数	
	主語代名詞		主語代名詞	
一人称	Yo 私は	hablo	Nosotros 私たちは	hablamos
二人称	Tú 君は	hablas	Vosotros 君たちは	habláis
三人称	Él 彼は	habla	Ellos 彼らは	hablan
	Ella 彼女は		Ellas 彼女らは	
	Usted あなたは		Ustedes あなた方は	



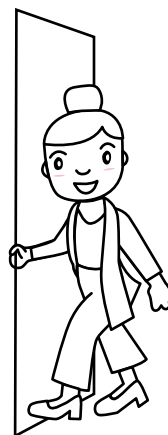
その他の-ar動詞

Estudiar (勉強する)

Caminar (歩く)

Cantar (歌う)

Nadar (泳ぐ)



例)

Ella entra en la habitación.

(彼女は部屋に入る)

動詞の原形
ENTRAR (入る)

prepara! 覚えましょう!

<規則動詞COMERの活用>

	単数		複数	
一人称	Yo	com <u>o</u>	Nosotros Nosotras	com <u>emos</u>
二人称	Tú	com <u>es</u>	Vosotros Vosotras	com <u>éis</u>
三人称	Él	com <u>e</u>	Ellos	com <u>en</u>
	Ella		Ellas	
	Usted		Ustedes	



その他の-er動詞

Beber (飲む)

Aprender (学ぶ)

Comprender (理解する)



では、次に**-er動詞**です。
『食べる』という動詞**<COMER>**
を使って確認していきましょう。

-ER動詞の場合も**-AR動詞**と同様に、動詞全体の**COMER**からおしりの**ER**をとった**COM**が語幹となり、語尾の**ER**は左の表のように変化します。



例) Él lee un libro.

(彼は本を読む。)

動詞の原形
LEER (読む)



さて、最後は**-ir動詞**です。
これも、原則は前の二つと変わりません。
重要なのは、動詞を①語幹と②活用部分
の二つに切り離し、活用部分には主語に
適した活用パターンを持ってくることです。

『住む、生きる』という意味のあるVIVIRを例として確認をしてみましょう。
VIVIRから活用部分のIRを切り離すと、語幹はVIVとなります。
規則活用をとる動詞はたくさんありますので、表の活用形を覚えて
ドンドン応用してみてくださいね。

例) Yo escribo una carta.

(僕は手紙を書く。)

動詞の原形
ESCRIBIR (書く)



その他の-ir動詞

Abrir (開ける)

Recibir (受け取る)

prepara! 覚えましょう!

<規則動詞VIVIRの活用>

	単数		複数	
一人称	Yo	viv <u>o</u>	Nosotros Nosotras	viv <u>imos</u>
二人称	Tú	viv <u>es</u>	Vosotros Vosotras	viv <u>ís</u>
三人称	Él	viv <u>e</u>	Ellos	viv <u>en</u>
	Ella		Ellas	
	Usted		Ustedes	



¡OJO!

語尾がそれぞれar, er, irで終わる動詞全てが規則活用を
取るわけではありません。

知らない動詞が出てきたら、辞書で意味を調べるときに、
規則活用か不規則活用かも一緒にチェックしましょう。



スペイン語

ADELANTE

www.adelante.jp

- ・一般・旅行・商業・DELE検定対策・プライベート
など目的やペースに合わせて選べるコース
- ・ネイティブ講師だからプチ留学気分
で自然なスペイン語がマスターできる!
- ・振替ができるので忙しくても安心!
- ・月謝払いOK!
- ・無料体験レッスン、教室見学等☆随時受付中

スペイン語教室 ADELANTE
〒530-0001 大阪市北区梅田 2-5-8 千代田ビル西別館 2F
TEL/FAX: 06-6346-5554
E-mail: info@adelante.jp・http://www.adelante.jp

LECCIÓN DE ESPAÑOL

スペイン語講座(Ⅲ) gustar型動詞について

前回の号では目的の代名詞に焦点を当てましたが、今回はこの目的の代名詞を使った、重要でよく使う構文を扱います。

Me gusta la música. (私は音楽が好きだ。)

この構文を習ったときに、何となくわかったようなわからないような気分になりませんでしたか。「私」と「音楽」の関係ですが、「私が音楽を好む」つまり、「私」→「音楽」のはずなのに、なぜかスペイン語では主語が「音楽」で「私」は目的語になっています(つまり「音楽」→「私」)。でも、少し考えてみてください。「好き」とか「嫌い」とかといった感情は自然に湧いてくるものではないでしょうか。つまり、私がこの曲を好きになろう、好きになろう、好きになろう…、と意識してその結果好きになるのではなく、ふと聞こえてきた曲が、「あれっ、何かいい感じだ」と感じるのがむしろ普通ではないでしょうか。

このことは好きになる対象が人の場合を考えればもっとよく理解できるかも知れません。

Me gustas tú. (君が好きだ。)

「私」が「君」を好きになろうと自分で意識したわけではないでしょう。初めて出会った瞬間にビビッと来ることもあるわけで、むしろ好きになったのは「君」のせいだ、とも言えます。逆に自分がはっきり主体となった表現は**querer**で表せます。

つまり、

Me gustas tú. (私は君が好きだ。)

Yo te quiero. (私は君を愛している。)

ちなみに、**gustar**は中世ではもともと「～を味わう」でした。それが、様々な段階を経て、現代語では「～が好きだ」という意味になりました。そしてその過程で元々《人》が主語で《対象》が目的語だったものが逆になったようです。名詞形の**el gusto**には今でも「好み」、「喜び」などとともに「味」の意味も残っています。

次に痛みを表す表現を見てみましょう。

Me duele la cabeza. (私は頭が痛い。)

この場合、「私」は何の意図も持っていないし、何の行動も起こしていません。頭痛がするのは嫌なことだけど、突然「頭」が「私」に対して痛んでくるのですよね。「頭が私に痛む」つまり「私は頭が痛い」です。

このように「自分」が意図しない好悪や苦痛を表す表現はスペイン語ではこの文型(間接目的語+動詞+主語)になることが多いのです。これらを「向かってくる」動詞と呼んでもいいかもしれませんね。更に例を見ていきましょう。

- Ese compañero de clase no me cae bien.

(私はそのクラスメートとは気が合わない。)

やはり、原因は自分じゃなくて相手です(と思いたいですよね)。

- No me salió muy bien el examen.

(試験はあまりうまく行かなかった。)

試験勉強を十分にしなかったのは自分のせいなんですけど…

次の2つの構文を比べてみましょう。

Yo creo que ella tiene razón.

(私は彼女が正しいと思う。)

Me parece que ella tiene razón.

(私には彼女が正しいと思われる。)

やはり、「私」がはっきりと意見を主張する場合が、**yo creo que...**で、控えめに言うときは**me parece que...**が適しているようですね。

更に例文を見ていきましょう。

- Vamos a vernos mañana y, ¿a qué hora te conviene?

(明日会おう。何時が君には都合がよい?)

- ¿Con quién estuviste anoche?

— **¡Qué te importa!**

(昨夜誰といたの? — お前の知ったことか!)

- Quiero el menú del día.

— **Lo siento. Ya no me queda.**

(本日の定食ください。)

すみませんが、もう残っていません。)

- ¿A quién le toca (el turno)? — Te toca a ti.

(誰の番ですか? — 君の番だよ。)

- Se me rompió el plato. (そのお皿が割れちゃった。)

最後の例は、**romper**「割る」に再帰の**se**を付けたもので「受身」です。つまり、**se rompió**は「割れる」。そして主語の**el plato**「お皿」が私に向かってきます。お皿が私に対して割れちゃった。「私」はむしろ被害者というわけです。本当は自分の不注意で落としちゃったのですが、責任を軽くする便利な表現ですね。

スペイン語は本当に奥が深いですね。時間が来たようなので今回はこの辺で。¡Hasta la vista!



仲井邦佳

なかいくによし/Kuniyoshi Nakai

- 立命館大学産業社会学部教授・スペイン語部会長。
- 京都イスパニア学研究会会長。
- 専門はスペイン語学。
- 著書に『コミュニケーションのためのスペイン語』(第三書房),『中級スペイン語一文法と演習一』(同学社)などがある。

書評 『ドン・キホーテの世界をゆく』

片倉 充造

スペインが誇るセルバンテスの世界的名作『ドン・キホーテ』(1605/15)についての綺麗な概説書(フォトエッセー)が登場した。美的感覚にあふれる100枚以上の関連写真で、全頁のおよそ70%相当が飾り付けられ、“和製ラ・マンチャの男”こと松本幸四郎氏の特別寄稿が花を添えている。

「第3章冒険への渴望」での“羊の冒険”の解説文に導かれ、見開き写真(44~45頁)に目を凝らせば、騙し絵よろしく被写体である羊の群れが一部人影とも重なり合う幽玄な光景を愉しむことができるだろう。こうした、全くの絵空事ではなくある種の〈現実〉に基づいた〈非現実〉の表出というセルバンテスの手法は、シュルレアリズムやラテンアメリカ文学の〈魔術的リアリズム〉とも共通すると言える。

「第6章主従の更なる狂気」でのシエラ・モレナの苦行([前編])や、「第8章新たな冒険と狂気」でのモンテシーノスの洞穴([後編])の謎は、ともに主要な「冒険」場面を成すものであり、当該地域についての高画質のカラー写真は、臨場感に溢れ、往年の宮本雅弘「ヴァーレ!」さらば! - 独断と偏見で読む『ドン・キホーテ』 - (川成・坂東・山崎・片倉編『ドン・キホーテ讃歌』、行路社1997年所収)の佳編を補完する雄弁なる風景を読者に提供して見せる。

「第11章「現実の冒険」との遭遇」で、「本物の冒険」(153頁)はドン・キホーテの妄想を遥かに超えるものと直観的に自覚したであろう想像世界の騎士は、やがてバルセロナの浜辺で“銀月の騎士”の挑戦を受け、敗退する



『ドン・キホーテの世界をゆく』
写真・篠田有史/文・工藤律子
論創社 (2009)

(〔後編〕64章)が、文学者ロサ・ナバロ・ドウラン『セルバンテスの場面集』(アリアンサ社、マドリード、2005年)のなかでの「ドン・キホーテは、バルセロナの浜辺で他界した。」という解釈に評者も共鳴するものである。作家セルバンテスの造詣が深かったとされるギリシャ悲劇の構成を用例とすれば、初め([前編]1~6章/[後編]1~7章)/中間([前編]7~46章/[後編]8~64章)/終わり([前編]47~52章/[後編]64章~74章)に相当する区分([前編][後編]全体および各編で、出発前/「冒険」の連続/帰還)と見る

こともあながち無理ではないであろう。

以上のとおり本書は、文筆家と写真家ならびに編集者の相互信頼に基づき、『ドン・キホーテ』の作品世界を实地に踏査・体験した“理想と信念で日常を力強く生きる”ための頼もしい文学案内書なのである。

かたくら・じゅうぞう

天理大学教授 スペイン・ラテンアメリカ文学

片倉 充造

かたくら じゅうぞう
天理大学国際学部言語教育研究センター教授。
天理大学アメリカス学会会長。
『スペイン学』編集委員。
専攻:スペイン・ラテンアメリカ文学。
著書:『ドン・キホーテ事典』(共編、行路社2005)、『ドン・キホーテ批評論』(南雲堂フェニックス2007)、『スペイン・ラテンアメリカ図書ファイル』(沖積舎2009) 他。



Juzo Katakura



フラメンコの今と昔

昭和30年代、中学生だった私はラジオから流れてくる歌とギターに血が騒ぎ、はじめてフラメンコという言葉を知った。高校生になって地方都市の先生からギターを習うようになったが、まだコピー機などない時代で先生が書いた手書きの楽譜を自分で書き写して覚えるという、まるで江戸時代の寺小屋のようなレッスンを受けた。

うまくなりたい一心で、楽譜を受け取るとその目のうちに夜中までかかって書き写し、一週間で全部覚えて張り切ってレッスンに行ったものだ。

折からギターブームがやって来て、仲間が集まる喫茶店で弾いたりしていたが、その頃クラシックギターの人達に言われたのは「フラメンコは派手に弾いてるけど、音は汚いし、ちっとも音楽的な深みがないんじゃないの」……ということだった。

悔しいが、その当時フラメンコの持つ深い音色、リズムの妙、独特の雰囲気などはレコードを聴くと少しは解るのだが、一体どうやって身につけることができるのか、田舎の高校生には皆目見当がつかなかった。

さまざまな活動の末、これは本場に行くしかないと思って、自分でお金を貯め勇んでスペインに渡った。まだフランコ独裁の時代だった。

幸いスペインでプロとして弾くようになり、だんだんフラメンコの深い所が解るようになってくると、これはなまじっかなことでは日本に帰れないと思うようになった。

2年が3年になり3年が・・・、そして長いことかかってフラメンコの深いフィーリングや間(ま)、音色、カンテ伴奏の妙味といったものをようやく体得したと思ったら、その間に世の中は目まぐるしく変化し、1980年代半ば頃から始まったモダンでノリの良い、いわば西洋音楽化した、土の臭いが無いフラメンコが主流となってきた。私が追い求めてきたものはすっかり「古いスタイル」と言われるようになってしまったのだ。



ロサリオ・ロベスと

たちの中にも私のような古風なスタイルを好むアーティストが少数ではあるが出て来ている。長い年月残ってきた古典にはやはり永遠の価値があるのだ。



ロサリオ・ロベスと

スペインでも本当のトカオール(古風で純粋なフラメンコを弾くギタリスト)はもうほんの一握りで絶滅危惧種になってしまった。

かくして伝統と革新のせめぎ合いは続く。あと100年後フラメンコがどんな風に変化しているか知るよしも無いが、あの世から見てみたいものだ。案外先祖帰りしているかも知れないと期待しつつ。

ジャズや、民謡など他のジャンルでも同じことが起きているという。しかし世の中良くしたもので、若い人

文・写真 エンリケ坂井



エンリケ坂井 (エンリケ・サカイ/Enrique Sakai)

ギタリスト、カンタオール

1948年岐阜県出身。16才よりフラメンコギターを志し'72年スペインに渡る。タブラオの長期出演などで多くの著名アーティストと共演、'77年帰国し国内で演奏活動。'88年セビリア市主催のビエナル音楽祭に招かれて出演。ランカピーノ、ロサリオ・ロベスと共演したライブCDの他、自身のSPコレクションを復刻したCD「グラン・クロニカ・デル・カンテ」をNo.10まで制作する。カンテの啓蒙活動として「フラメンコを歌おう」No.1、2を出版、「カンテとパルマの会」を'85年から主催して今に至る。

キ リ ト リ

don Quijote
in-country Spanish language courses

スペイン語コースと



クッキング



スキューバダイビング



ワインテイスティング

フラメンコ

11カ国にある
35のスペイン語学校

お問い合わせ、資料請求は
ヘッドオフィス
Calle Placentinos, 2
37008 Salamanca - España
Tel.: +34 923 26 88 60
Fax: +34 923 26 88 15
infocentral@donquijote.org
www.donquijote.org

日本とスペインをつなぐ無料スペイン情報誌 [アクエドクト]

acueducto 定期購読申込書

La revista española en Japón

スペイン情報誌acueductoの定期購読は、ファックス、郵送、E-mailでお申し込みいただけます。
以下のフォームに記入し、ファックスまたは郵送でご送付いただくか、必要項目をメールでご送付ください。

氏名 _____ 電話番号 () -

〒 _____ 住所 _____

必要部数 部

お申込先 ①郵送の場合 大阪市北区梅田2-5-8 千代田ビル西別館2F 有)ADELANTE
②ファックスの場合 06-6346-5554 ③E-mailの場合 info@acueducto.jp

ALEGRÍAS DE CÁDIZ

Las Alegrías son un palo del flamenco nacido en Cádiz y, como su nombre indica, es un palo alegre en el que se expresa el estado normal del ser humano cuando está libre de estrés y tensiones; en otras palabras, cuando está feliz y ese estado es el que hay que expresar en el escenario.

Las Alegrías son como el pueblo gaditano, un pueblo que ante los malos momentos siempre ha sabido sacar la parte alegre de las cosas; por eso las Alegrías no hubieran podido nacer en otro sitio más que en Cádiz.

Hoy en día, este palo ha cogido mucha fuerza en el mundo del flamenco gracias a intérpretes como Niño Ricardo o Sabicas. Pero los que lo han lanzado al estrellato han sido sin duda, Pericón de Cádiz, Chano Lobato, Juan Villar, Camarón de la Isla y Paco de Lucía; huelga decir que todos ellos son gaditanos.

Recuerdo que cuando llevaba cinco años tocando la guitarra, las Alegrías no me proporcionaban ninguna alegría. Las tocaba sin problemas, pero lo que me costaba era acostumbrarme a tocar recortado manteniendo la línea rítmica sin romperla.

A modo de anécdota, una bailaora me pidió que acompañara su baile, que tocara por Alegrías de Cádiz. Cuando terminó la actuación fui a pedirle perdón porque no salió tan bien como hubiera deseado, pero la bailaora con larga experiencia me dijo que no me preocupara, que eso siempre ocurre a los novatos, pero que me cuidara de evolucionar y que me sirviera de experiencia para que no volviera a pasar.

Desde entonces, siempre he procurado tener disciplina en lo concerniente al canto y al baile, y la responsabilidad que tiene el guitarrista para con sus compañeros.

Si con la Solea aprendí a expresarme con la guitarra, es con las Alegrías de Cádiz con las que aprendí a tener disciplina y responsabilidad y con ello, a disfrutar y pasarlo muy bien en las actuaciones.

Es muy difícil de interpretar, pero personalmente, me gusta mucho tocar por este palo pues puedo expresar todo lo que disfruto en el escenario.

Miguelón



フラメンコスタジオミゲロン Flamenco Studio MIGUELON

現役で活躍中のプロが講師をする
フラメンコ教室



- 入会金 5,250 円
 - ダンス(バイレ)クラス(グループ)
60分×4回 10,500 円
 - ギター・歌・パルマクラス(個人)
40分×3回 10,500 円
- …詳しくはお問い合わせ下さい。

石橋スタジオ

(主にダンスクラス)

池田市井口堂 1-9-3
センチュリーショウエイ VII F

梅田スタジオ

(ギター・歌・パルマクラス)

大阪市北区太融寺町 8-10
梅田高速ビル 604

E-mail

miguelon@nifty.com

WEB

<http://www.miguelon.jp/>

TEL 072-760-4858

フラメンコスタジオミゲロン

Flamenco Studio
MIGUELON



スペイン語学習テキスト
2011年発刊予定
お問合せはアデランテまで。

マドリードのスペイン語コース

コースは年間を通して毎週開講



早期予約割引あり

inhispania
tu escuela de español :-)

1 週間～長期コース。文法+会話。
文化レッスン。少人数制。課外活動。
経験豊かな教師たち。観光&ツアー。
フラメンコ・コース。宿泊施設紹介。
パーソナル・サポート。

Inhispania - (+34) 91 521 22 31 Montera 10-12, 1-1. Madrid
www.inhispania.com | info@inhispania.com





「アレグリアス・デ・カディス」

フラメンコの曲に「アレグリアス」というのがある。その名の通り、喜びを表す曲で、開放的で、幸福感ある曲である。

アレグリアスはカディスというアンダルシアの街で生まれ、貧しさや不幸の中で喜びを見つけ出してできたものである。

現在、この曲はとてもポピュラーな曲だが、カマロン・デ・ライスラとパコ・デ・ルシア、この二人のカディス人による功績は大きい。

僕は、フラメンコギターを弾き始めてから5年たっても、アレグリアスはあまり上手に弾けなかった。ただ弾くだけならば問題ないが、アレグリアス独特の明るさやリズムの流れに慣れるには苦労をした。

ある日、一人のベテランの女性の踊り手が、彼女の踊るアレグリアスの伴奏を僕に任せてくれた。そのショーでの出来事を今でもよく覚えている。確かに僕はアレグリアスを弾いたのだが、それはあまりにひどく、彼女の顔はゆがみ、歌い手はあまりのひどさに笑った。ショーが終わった時、半ペソをかきながら僕は謝りに行った。しかし、彼女は「心配しないで。初めての時にはよくあることだから」と慰めてくれた。

その経験以降、僕はより良く弾けるように気をつけ、二度と同じ失敗をしないように努力した。いつも歌や踊りについて勉強し、伴奏する時のギタリストとしての責任について考えるようになった。

ソレアで僕はギターの表現方法を学び、アレグリアスでは伴奏者として必要な訓練や、また演奏を楽しみながらショーをよりよくするための責任を学んだ。

アレグリアスは、むずかしい。でも、僕個人にとっては、舞台ですべての楽しみを表現できる好きな曲である。

ミゲロン



Miguelón ミゲロン

- フラメンコスタジオMIGUELON (ミゲロン) 主宰
- スペイン・セビージャ出身。
- 9歳の頃よりフラメンコギターを学び、14歳のときプロデビュー。
- その後スペインを中心に世界各国でコンサート、イベントショー、タブラオなどに出演。
- 1999年に日本に移り住み、関西を拠点として日本全国で活躍中。
- 現在ではギタリストに加え、審査員、イベント企画、ラジオ出演など活動は多方面に亘る。

スペイン留学.jp



スペイン
中南米への
留学相談
入学手続き
無料サポート!

06 - 6346 - 5554

www.spainryugaku.jp



イスパニカの通信添削講座

おすすめします! ● 基本文法を終えてしまった方 ● 「読み書き」にいまひとつ自信がない方 ● 出産や介護の合間にもスペイン語を続けたい方に

★通訳ガイド講座

検定3級に受かったら、通訳ガイドに挑戦してみませんか?
月1回、1年で修了

★スペイン語検定対策講座

ポイント解説+模擬テストで検定上級の合格をめざします。5級を新設。
1-2級・3級・4級・5級 月1回と2回のコース

はじめてのスペイン語

2度目のスペイン語

新聞を読もう

文章講座



童話で学ぶスペイン語
物語を読もう
児童文学翻訳クラス

「文法から学べるスペイン語」の執筆者が講師です。
月2回、1年で修了

理解にくい時制や関係詞などをもう一度整理します。
レベルⅠⅡⅢ 月1回と2回のコースあり

最新のニュースで読解力をつけ、時事単語もマスターします。 初級・中級・上級 各月1回、6ヶ月

自分の意見をきちんと伝えられる作文力を培います。
レベルⅠ・Ⅱは月2回6ヶ月 Ⅲは月1回1年

幼年童話で日常表現に慣れましょう。

1冊ずつ物語を読み進めるようサポートします。

子どもの本にふさわしい訳本づくりを。



〒135-0048 東京都江東区門前仲町1-9-10-502
TEL:03-3630-9711 FAX:03-3630-9717

http://www.hispanica.org

Extremadura: tierra de lo jondo



Fernando Cid Lucas

(Cáceres, 1979) Es investigador y secretario del Grupo de Investigación Reconocido de la Universidad de Valladolid sobre la Recepción del Imaginario Japonés en la Literatura Inglesa y Francesa de Viajes del Siglo XIX y, asimismo, miembro de la Asociación Española de Orientalistas de la Universidad Autónoma de Madrid. Ha escrito y coordinado una decena de libros sobre cultura japonesa; publicado un centenar de artículos en revistas tan prestigiosas como *Studi Ispanici*, *Revista de la Universidad de Antioquía* o *Japan Spotlight*. Ha pronunciado más de un centenar de conferencias en universidades españolas y de Alemania, Portugal o Irlanda. Actualmente trabaja en la edición crítica de la relación del franciscano extremeño Pedro de Burguillos, destinado en Japón en el s. XVII.

フェルナンド・シッド・ルカス

カセレス出身 1979年生まれ。バジャドリッド大学、19世紀の英国・フランスの紀行文における日本のイメージの受容についての調査グループの調査員をつとめている。日本文化に関する書籍を約10冊ほど執筆、編集しており、*Studi Ispanici*, *Revista de la Universidad de Antioquía* o *Japan Spotlight*等の著名な雑誌にも100以上の記事を提供。スペイン、ドイツ、ポルトガル、アイルランドの大学で行われている100以上の講演や学会での発表経験があり、現在は17世紀に日本に赴任したエストレマドゥーラ出身のフランシスコ会修士、Pedro de Burguillosの年代記の校訂版に取り組んでいる。

西側をポルトガル、南側をアンダルシア州、東側をカスティージャ・イ・レオン州に囲まれたエストレマドゥーラ州は、スペイン南西部に位置する自治州です。

フラメンコといえば、セビージャやグラナダをはじめとするアンダルシア州の都市が良く知られていますが、エストレマドゥーラ州も、その地理的な理由と、近隣の自治州から様々な時代に多くの影響を受けてきたこともあり、フラメンコのアーティスト達やフラメンコの研究者を多く輩出しています。

カセレス出身のフェルナンド・シッド・ルカス氏によるエストレマドゥーラに存在する豊かなフラメンコ文化についての解説。

Sin caer en tópicos fáciles, hemos de decir que existe buen cante jondo más allá de Andalucía. Quizá por proximidad geográfica (con Huelva, Sevilla y Córdoba como provincias bisagras) y por las influencias culturales que ha recibido de la comunidad autónoma vecina a lo largo de los diferentes periodos históricos, Extremadura puede hacer gala de poseer un ancho caudal flamenco, fructificado en el cante, el toque y la investigación flamencológica.

Desde hace tiempo, muchos han sido los nombres de cantaores y cantaoras ya universales que ha dado esta tierra; pongo por caso al famosísimo Porrina de Badajoz, Ramón el Portugués, Pedro Peralta (muy buen intérprete de farrucas, género nada fácil, por cierto), o al Niño de la Ribera, a quien con una voz muy suya se le han podido escuchar espléndidos fandangos en diversos festivales españoles.

Amén del personario, Extremadura cuenta, asimismo, con varias formas autóctonas de flamenco, tales como el tango o el jaleo extremeño, si bien, todas ellas brotadas del fértil tronco andaluz y de raíz puramente gitana. En nuestros días, son los jóvenes cantaores y cantaoras quienes se están encargando de darle el empaque y la perdurabilidad que éstas se merecen.

Todo el trabajo eminentemente artístico se complementa con la labor de teorización y sistematización que están realizando otros tantos

extremeños ilustres de este mismo ámbito, tales como el también poeta y novelista emeritense Félix Grande, con su *Agenda flamenca* (1987) y *Memoria del flamenco* (1995); o el guitarrista, felizmente reconvertido a ensayista, Perico de la Paula, quien firmase en 2008 el magnífico libro: *Tangos extremeños/Jaleos extremeños*.



Tampoco debemos obviar la seria y constante labor de la Peña Amigos del Flamenco de Extremadura, dirigida por un buen amante del flamenco y, aún si cabe, mejor persona, Federico Vázquez Esteban. A lo largo de su trayectoria no se ha conformado con la organización de recitales en diversas poblaciones extremeñas, sino que ha puesto en marcha -en colaboración con la Universidad de Extremadura- varios congresos en los que a la teoría se le ha sumado la práctica, y con los que ha querido llegar a cuantos más mejor, dejando a un lado la creencia de que el flamenco y lo jondo son propiedad sólo de unos cuantos.

A día de hoy, el flamenco en Extremadura está en franco desarrollo, apoyado por las televisiones autonómicas y por otros medios de comunicación. Tal vez, uno de los mejores favores que se le puede hacer al flamenco extremeño es que se le conozca de primera mano. Así, pues, queda lanzada la invitación. Ojalá sean muchos los turistas japoneses que vengan y comprueben por sus propios ojos y oídos que este bello arte ancestral tiene una buena y sincera sede en estas tierras meridionales. Me consta que los nombres aquí recogidos así lo desean. ¡Salud y jondo!

Fernando Cid Lucas

スペイン菓子との出会い

菓子修行のため、初めてマドリッドを訪れたのは、1992年11月、バルセロナ・オリンピックが終わった直後の晩秋のころだった。スペインというと、太陽が照りつける情熱の国、というありきたりのイメージしかもっていなかった私には、やたらと肌寒く感じたのを憶えている。フランス菓子に憧れ、フランスという国にも憧

れを抱いていた私には、(所謂一般的な洋菓子の世界の人間には、標準的なことではあるが)最初に受けたスペインの印象は何もかも野暮ったく期待はずれに見えたものである。

「何でこんな国に来ってしまったのだろう。」最初、スペインに着いたときの正直な感想だった。しかし、せっかく来たのだから、語学くらいは覚えようと語学学校に通い始め、そのうちせっかくだから少しでもこのマドリッドの菓子店で

働いてみたい、と手当たり次第に履歴書を送ったりするうちに、だんだんとスペインという国、そしてスペイン人に愛着を感じ始めていた自分がいたのだった。そんな私を拾ってくれたのが、恩師ダニエル・ゲレロ氏である。当時、3店舗の菓子、パン店を経営していたダニエルのもと、「オルノ・サン・オノフレ」菓子店で働くうちに、仕事はハードだったが、徐々にスペイン人の良さ、スペインという国の面白さに惹かれ始めていった。お

そらく、スペインという国のもつ華やかさとは別に、素朴な国民性とか情の厚さというもの、自分を魅了したのだと思う。わずか2年半ほどの滞在ではあったが、すっかりスペインにはまってしまった訳である。

しかし、洋菓子の本場、フランスで技術を磨きたい

という気持ちも強く、心が葛藤する中、スペインを後にし、フランスへ向かうこととなった。やっと本来の目的地であるフランスへ行けるというのに、なんだか非常に寂しい気持ちで向かったことを憶えている。

そうして、フランスで2年働いた後、郷里の長崎で店を出すことになった時、迷わずスペイン菓子という看板を掲げることにした。スペインの素朴な伝統菓子が好きだということもあったが、やはりスペインという国自体への関わりを強く持っていたという気持ちが強かったと思う。

マドリッドのサン・オノフレのダニエル・ファミリーと

のご縁もまだ続き、昨年もマドリッドを訪ねた際、友人共々わざわざ食事に招待してくれた。また、スペインで知り合った日本人ともずっと交流や友達つきあいが続いている。新年早々にも旅行の計画を仲間うちでたてているところである。スペインと自分との縁は薄くなるどころか、年々強くなっていくようである。

文・写真提供 スペイン菓子 サン・オノフレ
オーナーシェフ 山口正見



写真上 マドリッドの恩師、ダニエル・ゲレロ氏と



写真下 かつての同僚、フランシスコ・パコ・チーフ、サミラと

山口正見 やまぐちまさみ/Masami Yamaguchi

- 1967年 長崎県に生まれる。
- 1992年大学卒業後、「青山シャンドン」(東京)にて洋菓子作りの基礎を学ぶ。
- 渡西し、マドリッドにてダニエル・ゲレロ氏に師事、「オルノ・サン・オノフレ」「ラ・サンティアゲサ」「パナデリア・タオナ」(ブーランジェリー)に勤務し、スペイン菓子を学ぶ。
- 1995年渡仏し、アンジェ(ロアル地方)にて「トリアノン菓子店」(ミッシェル・ガロワイエ氏)に勤務。
- 1996年南フランスのトゥールーズにて「メゾン・ピロンチョコレート店」(レネ・ピロン氏)でチョコレートを学ぶ。
- 1998年長崎市の「スペイン菓子セヴィーリヤ」のシェフに就任。
- 2004年西彼杵郡時津町に「スペイン菓子サン・オノフレ」を開店。



don Quijote
in-country Spanish language courses

スペイン&ラテンアメリカで
スペイン語を
生きよう

11カ国にある
35のスペイン語学校



ヘッドオフィス

Calle Placentinos, 2
37008 Salamanca - España
Tel.: +34 923 26 88 60
Fax: +34 923 26 88 15
infocentral@donquijote.org
www.donquijote.org

LIBROS
ADELANTE書店

スペイン語の本 & 雑貨

www.
adelante
shop.jp

TEL/FAX: 06-6346-5554

GUADALAJARA, DE DÍA Y DE NOCHE

Guadalajara, de día y de noche. Ése es el espíritu de una ciudad para ser disfrutada durante las veinticuatro horas del día.

Su impresionante patrimonio histórico – artístico, su atractiva oferta cultural y de ocio, su gastronomía, sus magníficos parques, sus calles y sus gentes, convierten a Guadalajara en un inmejorable destino turístico.

Situada a apenas 55 kilómetros de Madrid, la capital nunca ha podido ensombrecer a una ciudad que preserva su esencia, sus tradiciones y sus raíces. Lejos de eso, su inmejorable localización estratégica y sus magníficas comunicaciones han sido las grandes fortalezas de una ciudad que ha sabido convertirlas en grandes oportunidades de desarrollo y crecimiento.



グアダラハラ、夜も昼も。これこそが、24時間楽しめるこの市の真髄です。

ここに存在する、歴史・芸術遺産、文化やレジャー、素晴らしい公園や通り、そして人々等が、グアダラハラを最良の旅行目的地にしています。

首都マドリッドから55キロ弱の所に位置していますが、ルーツや伝統を大切に守っているこの市が首都の影になることはありませんでした。それどころか、立地とアクセスの良さは、この市の持つ大きな強みであり、この長所を発展と成長に生かしてきました。

グアダラハラへのアクセス

＜電車の場合＞マドリッドより約35分程度

＜バスの場合＞マドリッドより約1時間程度

550° ANIVERSARIO DE GUADALAJARA CIUDAD

En 1460 Guadalajara dejó de ser villa y pasó a ser ciudad; un hito que el Ayuntamiento está conmemorando durante todo este año. Es una ocasión excepcional para reconocer y ensalzar una ciudad que ha sido protagonista en importantes episodios de la historia de España. Desde la conquista cristiana en el 1085, pasando por la llegada de Los Mendoza en la Baja Edad Media, su paso por la Ilustración o los importantes cambios que como ciudad experimentó en el siglo XVIII. Y de muchos de esos capítulos, son testigos mudos destacados monumentos como el Alcázar Real (siglo IX), el torreón de Alvar Fañez (siglo XIV), la iglesia de Santiago (siglo XIV), la concatedral de Santa María (siglo XIII) o nuestro Palacio del Infantado, concluido a finales del siglo XV.

Éste es sólo una pequeña parte del patrimonio de Guadalajara, pero no puedo ni quiero olvidarme de otras joyas como el Salón Chino del Palacio de la Cotilla, la Capilla de Luis de Lucena o el Panteón de la Condesa de la Vega del Pozo.

El Ayuntamiento de Guadalajara está realizando un esfuerzo sin precedentes por dinamizar turísticamente la ciudad a través de interesantes iniciativas que fomentan el conocimiento de “lo nuestro” entre nuestros propios vecinos, y lo “exportan” más allá de nuestras fronteras.

Guadalajara es una ciudad que merece ser conocida y vivida.

Como Alcalde y como vecino que ama esta tierra, no puedo dejar pasar esta oportunidad sin invitaros a que os adentréis en ella, a que la respiréis, la sintáis y la disfrutéis. Porque su rico patrimonio esconde la esencia pura de la Alcarria, que puede saborearse a través de su gastronomía y sentirse a través del carácter afectuoso y amable de sus gentes.

Os invito a que nos conozcáis y a que disfrutéis con nosotros, de día y de noche, de nuestra querida ciudad. Guadalajara os recibe con los brazos abiertos.

Antonio Román Jasanada
Alcalde de Guadalajara

グアダラハラ市 550 周年

1460年、グアダラハラは町から市となりました。この重要な出来事を記念して、今年一年間、市をあげて祝賀が行われており、この市の良さを再認識するための減多にない機会となっています。また、この地は、1085年にキリスト教徒の国土回復、中世後期メンドーサー一族の到着、啓蒙時代、そして18世紀に都市として経験した多くの重要な変化など、スペインの歴史上の重要なエピソードの主役となってきました。

グアダラハラに残るアルカサル(9世紀)、アルバル・ファニエスの塔(14世紀)、サンティアゴ教会(14世紀)、サンタ・マリア大聖堂(13世紀)、また15世紀終わりに建てられたインファンタド宮殿などが、上に述べた様な時代の証人として傑出しています。

しかしながら、これらはグアダラハラの持つ遺産のほんの一部でしかなく、コティージャ宮殿の中国の間、ルイス・デ・ルセナ礼拝堂、ヴェガ・デル・ボソ伯爵夫人霊廟などといった、その他の素晴らしい遺産を忘れることは出来ません。

現在、グアダラハラ市は、観光活性化の為に、前例のない取り組みを行っており、それは、この地に住む住人たちが自身が、“自分たちの市”についての知識を深め、これを外へ“輸出”出来るようにするというものです。グアダラハラは知るに値するところです。

市長として、またこの土地を愛する住人として、この都市をより深く知り、感じ、楽しんでいただけるよう皆様に招待致します。グアダラハラには隠されたアルカリアの真髄が存在しています。この真髄は、料理を通して味わい、情味溢れる人々の性質を通して感じられるものです。

昼も夜も、グアダラハラを知り、楽しんでいただきたく、心より皆様のお越しをお待ちしております。

アントニオ・ロマン・ハサナダ
グアダラハラ市長



Antonio Román Jasanada

アントニオ・ロマン・ハサナダ

Nacido en Guadalajara el 21 de junio de 1965.
Alcalde de Guadalajara desde mayo de 2007.
Licenciado en Medicina por la Universidad de Alcalá de Henares. Especialista en Medicina Interna.
Facultativo Especialista de Área de Medicina Interna en el Hospital del SESCAM de Guadalajara.

Presidente Provincial del PP desde el año 2000, miembro del Comité Ejecutivo Regional y de la Junta Directiva Nacional.

Diputado nacional en el Congreso de los Diputados en VII Legislatura y Senador en VIII legislatura por Guadalajara.

Concejal del Ayuntamiento de Guadalajara desde 1995. Portavoz del Grupo Popular en el Ayuntamiento de Guadalajara (2003-07). Teniente de Alcalde (1999-2003). Concejal delegado de Deportes (1995-2003) en el Ayuntamiento de Guadalajara.

También destaca su faceta como deportista. Fue jugador de balonmano en la liga ASOBAL.



シリーズ ゲルニカをめぐる3つのエピソード

川成 洋

かわなり よう / Yo Kawanari

1942年札幌で生まれる。

北海道大学文学部卒業。

東京都立大学大学院修士過程修了。

社会学博士（一橋大学）。法政大学教授。

スペイン現代史学会会長。

主要著書『青春のスペイン戦争』（中公新書）、『スペイン戦争—ジャック白井と国際旅団』（朝日選書）、『スペイン—未完の現代史』（彩流社）、『スペイン—歴史の旅』（人間社）ほか。

趣味：合気道6段、杖道3段、居合道3段。
法政大学合気道部部长、法政大学空手部部长



スペイン検定

あなたが知っている、知らないスペインの四択・百問

川成洋、坂東省次 編著

【税込定価】1,575円（本体1,500円）

【出版社】南雲堂フェニックス

【ISBN】9784888964111

【仕様】四六判 並製 約220頁

その2——ゲルニカ爆撃の報道

ゲルニカ後のフランコ反乱軍の軍事目標はビルバオの制圧であり、さらに国境の町イルンへと戦線を伸ばし、バスク地方の出入口を制圧・管理することであった。そのビルバオも6月19日に陥落し、共和国軍の北部戦線は崩壊した。崩壊したゲルニカやビルバオをフランコ軍側から取材し、フランス国境に近いサン・セバステイアンに辿りついた『東京朝日新聞（現・朝日新聞）』特派員坂井米夫記者は、その町でフランコ軍によって足止めさせられる。その時の様子を坂井は次のように述べている（『ヴァガボンド通信』改造社、1939年。復刻増補版『動乱のスペイン報告——ヴァガボンド通信・1937年』川成洋編、彩流社、1980年）。

U・Pのバックカード君と「アバス」のドオスビダル君は一足さきにきていて「外人記者は国境を通さないとやっている。昨日からイルンに行ったり来たりしているようだが、どうしても駄目だ」と緊張して言う。（中略）ハースト系のニッカーボッカー君が投獄されたのもここで、その時もどうなるかわからなかったのをアメリカの記者団の奔走で辛くも釈放された。アメリカで人民戦線に反対していたのはハースト系新聞だけではないか。あの事件以来ハーストは革命軍側「当時、日本の新聞や雑誌といったジャーナリズムでは、フランコ軍を「革命軍」と呼称していた——川成記」に特派員を送らないのだ。（中略）晚餐をすまして出ようとする時、「そうだ！ われわれが揃ってこちらにやって来たので、ひょっとすると検問なしの電報をサンジャン・ド・リュスあたりから出すんじゃないかと、とてもない嫌疑をかけられているのかもしれない」と気の早いバックカード君はすぐサラマンカ政府[フランコ軍政府]のこと——川成記「当局に打電だけでは心細いと夜半電話をかける。3日後の朝、国境通過許可書の電報が来るか早いか自動車を飛ばし、出国手続きを終わってイルンとフランスのアンダインの間にかかっている国境の橋を渡る。振り返ったら呼び戻されやしないかと、橋の中頃から知らず知らずに足が速くなって、フランスの土を踏んでも何だか夢のよう、ダロー君はそこらじゅう闊歩している。大きく呼吸する。「空気まで違ったようだ」「もう何も話しても心配ないよ」。税関の検査がすんで自動車で乗り込んだところへ、バックカード君が小走りにやってきた。「御機嫌よう！」「この次は上海で……」。シモカアの並樹道に自動車を停め、丘の上に登ってスペイン領を眺めていると、暗い雨雲がぐんぐん広がってきた。

このようにして、ゲルニカの爆撃を知った外国人新聞記者に対する身柄拘束を含む厳しい締め付けは、自陣の正統性を喧伝してもらうために外国人ジャーナリストを利用する「ジャーナリズムの戦争」と言われただけあったのだ。

ところで、このゲルニカの惨事を伝えたスティア記者は、かねてからフランコ陣営の新聞報道担当官をもめ事が絶えなかったこともあって、即刻イルン経由でフランスに脱出した。

当時『タイムズ』はスペイン共和国政府軍側とフランコ軍側の両方に特派員を派遣していた。フランコ軍の従軍記者だったスティアの後釜に収まったのが、フリーランスのキム・フィルビーであった。すでにKGBのスパイだったフィルビーはフランコ側で得た軍事情報をソ連に流していた。彼は、1937年12月、戦場ならでは、九死に一生を得る体験をする。テルエル攻防戦の取材中に共和国軍の砲弾攻撃を受け、同行した3人の新聞記者が即死し、フィルビーだけが頭部と手首に怪我をしたのだった。しかしながら、余談になるが、このテルエルの被爆事件は「実は仕掛けられた事件」だったと、後年『イヴニング・スタンダード』紙（1991年10月21日付）が素つ破抜いた。この記事によると、もちろんこの事件の下手人は、フィルビー。彼の取材態度や行動に不審を抱き、彼がソ連に情報を流していることを突き止めたディック・シーブシャックス記者を殺害するために、「フィルビーが車の中に手榴弾を隠しておいて、それが爆発する寸前に自分が車から脱出した」のである。ちなみに、このことを証言したのは、スペイン内戦期、スペイン大使館に勤務していたトム・ダブリンという外交官だった。フィルビーはすでに1988年に亡命先のモスクワで死亡しているので、この記事についての真贋の程は確かめ難いが（川成洋『紳士の国のインテリジェンス』集英社新書、2007年）。

翌1938年3月、フィルビーはフランコ総統から最高位の「赤十字軍功章」をじかに胸につけてもらう。これ以降、「フランコ総督に叙勲されたイギリス人記者」としてフィルビーはフランコ陣営で自由に取材できるようになり、1939年3月28日、フランコ軍のマドリッド入城の記事を『タイムズ』に送りスペインでの従軍記者生活を終える。41年9月、フィルビーはMI6（イギリス海外秘密情報部）の第5部「イベリア半島」の部長に抜擢される。そして45年の年末、第2次世界大戦期の情報活動の功績に対して彼は、バックingham宮殿で



大英帝国勲章 (M B E) を授与される。さらに彼は M I 6 でとんとん拍子に出世し、M I 6 の対ソ防諜の責任者となり、アメリカの原子力開発の秘密情報をはじめ、アルメニア解放のための C I A と M I 6 の共同作戦などさまざまな重要な極秘情報を事前にソ連に漏らしていたが、ついに「ソ連のモグラ」であることが見破られてしまい、「K G B の高級将校」としてソ連に亡命する。彼の処遇を巡って英米両情報部高官、イギリス下院で政府高官と議員の間で激論が飛び交うほどの「20世紀最大のスパイ」と言われたのだった (川成洋『紳氏の国のインテリジェンス』集英社新書、2007年)。

一方、スティア記者は、後に『ゲルニカの樹』(1938年)という本を出版し、その中で次のように述べている。

結局のところ、バスク人は少数民族で、銃も飛行機も対して持っていなかったし、外国からの救援も受けられなかった。…しかし彼らは、この痛ましい内戦のあいだずっと、人間性と文明の灯火を高々と掲げていた。捕虜を殺しもしなければ拷問もせず、捕虜の命を犠牲にして楽しむような真似は一切しなかった。もっとも残酷な状況にあっても彼らは自由な自己表現と信念を捨てなかった。彼らは几帳面に…隣人にもある程度の敬意を払うよう求めるように。…すべての法を遵守した。人質もとらなかった。彼らをあざむく連中の非人間的なやり方にも抵抗をもって応じるだけで、それ以上の何もなかった。(後略)

その後、第二次世界大戦の勃発に際して、アフリカとヨーロッパのファシスト軍の戦略を人々に警鐘し、最前線での心理戦にいち早く注目したスティア記者は、止むを得ずペンを捨て、イギリス陸軍の情報部将校になる。その後特殊任務部隊大尉としてビルマ戦線で日本軍と対峙する。日本兵に向けた「伝単」、拡声器による呼びかけなど、日本兵に対する投降工作を指揮するが、1944年12月25日、恒例の部隊内のクリスマス運動会のために、部下たちを乗せて運転中、事故を起こし即死する。享年35歳、あまりにも若すぎる死であった。その時彼が身につけていた時計は、バスク大統領ホセ・アントニオ・アギーレから贈られたもので、「バスク共和国よりスティアへ」と彫られていた (ニコラス・ランキン『戦争特派員——ゲルニカ爆撃を伝えた男』塩原通緒訳、中央公論新社、2008年)。

ところで、すでに述べたように、「世界中の新聞の第一面を独占した」ゲルニカ爆撃は我が国でどのように報道されたのだったろうか。

当時の『東京朝日新聞』は、スペイン内戦の報道だけで、4回も号外を発行するほどの報道体制であったが、何故か、このゲルニカ爆撃の報道を全くしていない (川成洋『30年代日本の新聞報道—スペイン戦争の受容と反応』、彩流社)。ただ、5月1日付けの『大阪朝日新聞』はほんの数行、しかも間接的な報道をしている。『大阪日日新聞 (現・毎日新聞)』にも、同様な記事がある。6月20日付けの『大阪朝日新聞』には、フランコ軍の観戦武官だった西浦進陸軍大尉 (当時) の「人命には想像するほどの脅威はない」という楽天的な談話を載せている。しかし、この西浦大尉のスペイン滞在は、1936年10月から12月までのほんの3か月弱に過ぎなかったものであり、翌年3月1日付けで陸軍省軍事課勤務となっている (木戸日記研究会編『西浦氏談話記録』日本近現代研究会)。したがって、彼はゲルニカの惨事を目撃したわけではなく、単なる推測を述べたにすぎなかったのだった。

それにしても、我が国の3大全国紙がゲルニカの惨事をおざなりにしか報道していなかったのである。たとえその3大紙がスペインに特派員を送り込んでいなかったとしても、ロンドンやパリの支局から、あるいは当時の同盟通信から、あるいは提携している外国の大手の通信社から、ゲルニカの爆撃にニュースは入っていたはずである。事実、前記の坂井米夫記者はゲルニカの惨事とその後のフランコ側の対応を取材している。ただ断言できるのは、在欧の日本人記者がゲルニカ爆撃に気づかなかったはずがない。とすると、どこかでこの惨事を黙殺する、あるいは隠蔽する作為が働いたのであろう。おそらく、編集段階ではあるまいか、惜しむらくは、こうした姿勢が、当時の3大紙のありようだったのである。

法政大学教授 川成 洋



図説 スペインの歴史

【著者】川成洋 [著] / 宮本雅弘 [写真]

【ISBNコード】9784309725949

【税込定価】1,890円 (本体1,800円)

Enforex

スペイン語ワールドで
スペイン語を学ぼう

厳選された
24校

スペイン語学校
スペイン&ラテンアメリカ

ヘッドオフィス

Alberto Aguilera, 26
28015 Madrid - España
Tel.: +34 91 594 37 76
Fax: +34 91 594 51 59
Email: info@enforex.es
www.enforex.com

マドリッドの夜(3)

桑原真夫

くわばらまさお
詩人・エッセイスト 広島県鞆の浦出身

1977年よりほぼ毎年スペインを訪問。1984年から1989年まで銀行員としてマドリッドに駐在。ヨーロッパ在住約14年。

スペイン関係主要著書：『斜めから見たスペイン』（山手書房新社）、『それぞれのスペイン』（共編著）（山手書房新社）、『スペインの素顔』（河出書房新社）、『スペインとは?』（沖積舎）、『ロサリア・デ・カストロという詩人』（沖積舎）、『我が母へ』（沖積舎）、『ガリシアの歌・上巻』（行路社）、『花へ』（写真詩集）（山手書房新社）他多数。



Masao Kuwabara



ガリシアの歌 上巻

ロサリア・デ・カストロ著
桑原 真夫（翻訳）
【税込定価】2,520円（本体2,400円）
【出版社】行路社
【ISBN】9784875344193
【仕様】A 5 ハードカバー 203頁

今回はもう一つのマドリッドの夜を紹介する予定であったが、多くの読者から第二号で約束した「カジノ必勝10カ条」を開示するようにとの要請があるので、ここに已む無く「10カ条」を披露することとする。尚、これは私の個人的なルーレットに勝つための10カ条であり、誰でもが勝てる法則ではないので念のため。

- 第1条:カジノを訪れるのは夜11時を過ぎてから。(それまでは冷やかしの観光客が多く、落ち着いて賭け事ができない。11時ころを過ぎるとプロの方々やカジノを真剣にやる真面目なお客が大勢となる)
- 第2条:受付をすますとトイレに立ち寄ること。(身だしなみを整え、気持ちの整理をする)
- 第3条:ルーレットの台を確認する。どの台に一番流れがでているか。ゼロが一度でも出ている台は敬遠する。
- 第4条:女・老人の多い台は敬遠すること。(賭け事に最も向かない人種は女と老人。横に彼ら彼女らがくると集中力やツキが逃げてしまう)
- 第5条:台が決まったら座る場所を確保する。(立ったままでやると疲れる。短期決戦の集中力の勝負のため、精神力と体力の勝負になる)
- 第6条:23(赤)を中心に流れを読む。(このところは個人的なノーハウ、奥義につき詳しくは語れない)
- 第7条:流れがきたら一気呵成に攻める。(一瞬の躊躇が挫折を呼ぶ)
- 第8条:どんな賭け事も必ず潮目の変化がある。潮目を感じたらすぐに席を立つ。またディーラーが代わった場合も席を立つ。
- 第9条:最長でも1時間以上はカジノにいない。飽くまで短期決戦と心得る。(カジノは長くいればいるほど餌食になるようにできている)
- 第10条:どんな小額でも勝った場合は現金に換えてわき目をふらずに出口に走る。(これができる人はもうプロ)

私の経験からこれら10カ条がクリアできたときは100%勝っていた。第1条から第3条までは自分の意思の力で制御できるが、第4条5条は自分の意思ではどうしようもない面もある。自分が大勝していると回りに女・老人がたかってくるがよくある。そんなケースは一時避難するしかない。避難しているうちに自分のツキが逃げてしまっていることも度々である。

上記の10カ条が一番難しいのは第10条である。どのカジノでもExchangeの場所が一番奥まった場所にある。ということは勝ったチップを現金に換えて出口に向かうとき、必ずさっきまで自分がいた賭場を通ることになる。するとつついポケットの現金に手がいつてしまい「少しくらいつまみ食いをしてもいいだろう」という気持ちで、またルーレットに張ってしまう。もうツキも

体力もなくなつたところに現金を賭けると正に餌食になってしまう。そんな状況ではまず負ける。負けると熱くなる。今日はこれだけ勝っているのだからと、折角現金に換えた勝ち分をきれいにすってしまう。それどころか使ってはならない手元の大切なお金にまで手をつけ、結局は大敗して打ちひしがれて出口に向かうことになる。寄り道をしなければ堂々と勝者で帰れたのに!

誰でも自分の好きな数字というものがあるが、私は基本的には23を中心に賭けた。あるときそろそろ23が出ると読んで手持ちのチップの全てを23に賭けたことがある。見事に的中して(配当は円貨にすると相当の高額であった!)その台を取り囲んでいたお客もやんややんやの大騒ぎとなった。私は彼ら一人一人と握手をしてその祝福に答えたのであった。

また、たまに同じ数字が何回も続けて出ることがある。あるとき24に小額のチップをおいたところ、見事当たったのでそのままにしておいた。ところがまた24が出た。そこで36倍 $2 \times 7 = 28$ 倍となった金額をまたもとの小額に変えて改めて24においた。ところがまた24が出た。そしてなんと次も24!合計4回続けて24が出たのであった。チップはそのままにしておいたら5回目はさすが違う数字が出て全部とられてしまった。最初においたチップを途中で減額せずにかつ4回目の24で引いていたら巨額の金額が懐に入ったのにと、あとで臍をかみながら逃げた魚の計算をしたのであった。

また逆にどうしても自分のイメージどおりに数字が来ないツキに見放された日もよくある。そういったときは決して自分が決めた予算以上はやらない。これもセンプロの原則である。賭け事に弱いタイプは(1)お金持ちで、(2)プライドが高く、(3)自分は賭け事に強いと信じていて、(4)すぐかっとなる人々である。こういった種類の人間が毎夜毎夜カジノに押し寄せると、カジノのオーナーは笑いが止まらない。

賭け事のついでにマドリッドでの麻雀について触れておく。いまやヨーロッパの大都市のどの町にも雀荘があり、しかも電動式の麻雀卓が完備している。私がマドリッドで麻雀をやったころはまだ手でかき回す古いタイプの卓であった。そのころのマドリッドには正式な雀荘がなく、中華料理店の一隅を借りて麻雀をやっていた。麻雀を始めると決まって徹夜となり、最後は(オーナーはとうに帰宅しているので)自分たちで店閉じまいをして早曉の街に出て行ったものである。

これまでに数知れぬ回数の役満をやった私ではあるが、テンホー(親で配パイと同時にあがっている)をやったのは後に先にもマドリッドだけである。このときのメンバーもよく覚えている。銀行員のYさんとTさん、商社マンのIさんであった。一生に一度できるかどうかと言われるテンホーである。案の定、私は翌日カステジャーナ大通りで交通事故にあったのであった。(つづく)

桑原真夫

カタルーニャ人にとって一年で最も重要な日

今年もクラシコ（伝統の一戦）「バルサ対レアル・マドリー」が迫ってきている（11月29日）。クラシコというとメッシやロナウドをはじめスーパースター同士の競演というエンターテインメント性ばかりが注目されがちだが、クラシコの真の醍醐味は相容れない二つの国すなわちカタルーニャとスペインの代理戦争という側面ではないかと私は考える。

二つの国の違いはスタジアムの入り口を見たら一目瞭然である。マドリーのホーム「サンティアゴ・ベルナベウ」の入り口ゲートには「¡Bienvenidos!（スペイン語でようこそ）」と書かれている一方で、バルサのカンプ・ノウには「Benvingut!（カタルーニャ語でようこそ）」と表記されている。国が違うのだから言葉が違うのは当然のことである。カタルーニャとスペインの政治的・歴史的対立は中世にまで遡るが、両クラブの間に明確なライバル関係が生まれたのはフランコ独裁政権時代からである。1939年のバルセロナ陥落をもってスペイン内戦はフランコ軍の勝利で終結した。当時フランコ軍の兵士として戦争に参加しバルセロナ陥落に居合わせた元レアル・マドリーの選手サンティアゴ・ベルナベウは終戦後間もない1943年にレアル・マドリーの会長に就任した。フランコ政権と親交が深かったベルナベウの会長就任によりレアル・マドリーはフランコ政権の文化的シンボルとしてフットボールの世界で長きに渡って猛威を振るうことになった。1943年の総統杯（現在の国王杯）の試合でバルサ相手に11対1という歴史的な大勝を収めたり、バルサが九割方獲得で合意していた南米の至宝「ディ・ステファアーノ」を政治的圧力により寸前で横取りし、そのディ・ステファアーノの大活躍でチャンピオンズカップ（現在のチャンピオンズリーグ）5連覇という離れ業をやったのけたり、カンプ・ノウでのバルサ戦でペナルティーエリアから3メートルも手前のファールでペナルティーキックを獲得する（悪名高いグルセッタ事件のことである）など、フランコ時代におけるマドリーの強さと政治力は他の追随を許さず、時としてレフェリーはフランコ政権の傀儡のようであった。マドリーの栄光の傍らカタルーニャ人は己の無力を呪い、時折バイオレンスに訴えることもあったが、その度に逮捕・負傷という代償を払わねばならなかった。

当時、反中央色の濃いカタルーニャに対して、フランコ政権は自治権を剥奪しカタルーニャ語及びサニエーラ（カタルーニャの国旗のこと。黄色に赤の4本線が入ったデザインでバルサのエンブレムにも刺繍が施されている）の公式使用を禁じた。カタルーニャ主義の旗艦バルサに対しても、カタルーニャ語（英語起源）のクラブ名「Futbol Club Barcelona」を「Club de Fútbol Barcelona（スペイン語）」に変更するように強制的に命じ、クラブの執行部は中央より派遣された役人が担うようになり事実上フランコの支配下に置かれた。内戦前1万人以上いたソシオ（会員）の数は、戦後3500人にまで

減少し、体制の圧力と深刻な財政難でクラブの存続自体が風前の灯であった。



フランコ政権時代のエンブレム

F.C.B. (Fútbol Club Barcelona)ではなく、C.F.B. (Club de Fútbol Barcelona)になっている

しかしながら1940年代に入ると瀕死のクラブがカタルーニャ民衆の支持を急速に獲得し華麗な復活劇を演じる。1943年にはソシオ数が内戦前の水準を大きく上回り15000人を突破した。独裁体制に苦しむ民衆たちはバルサというクラブを通じてカタルーニャの自由や自治権、民主化を求める抗議デモを展開した（スタジアムの周辺等で）。中世のコルツ（身分制議会）の制度からも分かる通り、カタルーニャは市民中心の自治や民主主義が比較的早い時期から確立されていた地域である。その伝統を引き継いだソシオ制度、どんなに時代が変化しても失われないバルサの洗練された芸術性と気品、勇敢さは、ギフレやジャウマ1世、ガウディ、ジュジョール、ダリ、ミロ、ラモン・リウイラ歴代のカタルーニャ人が有してきた崇高さと少なからずリンクしており、FCバルセロナという存在はカタルーニャ人が長い歴史の中で作り上げてきた永久不滅の文化的財産なのである。スペイン継承戦争やスペイン内戦、フランコの圧政で散った多くの同胞たちの祈りを胸に再びバルサは聖地カンプ・ノウに永遠のライバル「レアル・マドリー」を迎え撃つ。カタルーニャ人にとってフットボール観戦はただの娯楽ではない。フランコ政権の象徴であったレアル・マドリーがカンプ・ノウを訪れる時、それはまさにカタルーニャ民族の誇りと威信をかけた闘いなのである。

文・写真 松田 湧



松田 湧

まつださえる/Saeru Matsuda

1983年5月19日生まれ。宮崎県出身。
1992年にFCバルセロナが来日した際にファンになり、2007年には念願のソシオ入会を果たす。京都外国語大学大学院でFCバルセロナをカタルーニャ民族主義の側面から研究中。

スペイン語学習コース

スペイン語学習
各種アクティビティ
宿泊先

通年、年齢不問、レベル別クラス（初級～上級、コース、個人授業 他）



COLEGIO DELIBES



“VICENTE DEL BOSQUE”
プログラム

スペイン語学習 + サッカー
宿泊先

7月～8月

colegiodelibes

Avda. Italia, 21
37007 Salamanca (España)
delibes@colegiodelibes.com

www.colegiodelibes.com

LIBROS
ADELANTE書店

スペイン語の本 & 雑貨
www.

adelante shop.jp

TEL/FAX: 06-6346-5554

ih ESPAÑA

ESP
WW

世界で最も話されている重要な言葉、スペイン語。IHス

年間を通じて幅広いコースを展開。一人一人の
興味に応じた内容で全レベルに対応しています。

厳選された滞在先をご案内しています。

また、充実のカルチャー・アクティビティー
とエクスカーションがお楽しみいただけます。

スペインの言葉と文化をじっくりと学ぶ機会。
8つの都市で皆さんをお待ちしています...

1953年に創立の世界規模の機関の信頼と
世界の皆様からの名声を誇る学校です。



IH スペインはインスティテュートセルバンテスの認定校です。

PAÑOL CON **INTERNATIONAL HOUSE ESPAÑA**
www.ihspain.com

スペインで効率的に、楽しみながら学んでみませんか。



IH サン・セバスティアン(ラ・クンサ)



IH バルセロナ



IH パルマ



IH マドリッド



IH バレンシア



IH コルドバ

IH セビーリャ(クリック)

IH カディス(クリック)

yo  ihSpain

FOR STUDENTS WHO LOVE LEARNING AND LIVING

お問合せ先(日本語でどうぞ)

japan@clic.es; spanish@bcn.ihes.com



アリカンテ大学付属外国人向け スペイン語コース

CURSOS DE ESPAÑOL

毎週月曜日入校可

1週間から長期まで

初心者から上級者まで

大学キャンパスでの授業

豊富なアクティビティー

DELE試験会場



Universidad de Alicante



スペイン語の本 & 雑貨

www.

adelante.jp
shop

学習テキスト、文法問題集、レベル別副読本、
D.E.L.E. 試験対策本、絵本など
各種取り扱っています。送料全国一律280円
8,000円以上のお買い上げで送料無料!



スペイン語

ADELANTE

www.adelante.jp

TEL/FAX: 06-6346-5554
email: info@adelante.jp

「私のスペイン語、通じた♪」を実感

- ・ネイティブ講師だからプチ留学気分で自然なスペイン語をマスター
- ・定員6名までの少人数制グループレッスン
- ・ヨーロッパ共通参照枠CEFのレベルに即したカリキュラム
- ・振替ができるので忙しくても安心
- ・楽しい交流パーティーや文化イベントでスペイン語仲間がいっぱい
- ・目的やペースに合わせて選べるコース
(一般・旅行・商業・DELE検定対策・プライベート・
スペイン語の本を読むコースetc.)

www.adelante.jp

スペイン語教室 ADELANTE

〒530-0001 大阪市北区梅田 2-5-8 千代田ビル西別館 2F

TEL/FAX: 06-6346-5554

E-mail: info@adelante.jp・http://www.adelante.jp

スペイン語書籍の販売も行っております。
お気軽にお問合せください。



スペイン留学.jp は
スペイン留学サポートのエキスパート。

www.spainryugaku.jp

スペイン & 中南米への留学相談、手続き代行無料サービス

安心して出発できるよう、全力でサポートいたします

1週間のプチ留学から長期プログラムまで、色々な目的に合わせて豊富なラインアップ。あなたにぴったりの留学スタイル選び、入学手続きまで無料でお手伝いいたします。語学留学、シニア向けのロングステイプログラム、スペイン語+フラメンコ、スペイン料理、スペインワイン講座、など楽しいプログラムもあります。

スペイン全土、メキシコ・チリ・ペルーなど数多くの語学学校と提携

言葉に自身がなく、学校とのやり取りが不安な方も大丈夫。
入学申請書類の作成や必要な書類の送付、留学費用の海外送金などは全て代行いたします。

- ・学校への出願サポート
- ・学生ビザ申請書記入のお手伝い
- ・留学費用の海外送金
- ・ホームステイ、寮、又はシェアフラット、アパート等の申込み
- ・空港出迎えサービスなど、
各種オプションサービスの依頼代行

